恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅸ

第 94 次調査

－日立製作所中央研究所構内純水設備付属建屋建設に伴う調査－

2016 年 3 月

株式会社日立製作所中央研究所
国分寺市遺跡調査会

序

恋ヶ窪遺跡は、本町遺跡とともに国分寺市の縄文時代遺跡として、明治時代から大正時代を経て、昭和時代初期にかけて考古学界に広く知られてきた。本町遺跡は“国分寺村石器時代”遺跡として報告され、「遺物包含層」・「遺物散列地」（遺物散布地）用語の命名端緒となった遺跡であり、恋ヶ窪遺跡は 1922 年に埋甕遺跡、1937 年に敷石遺構の発掘の報告が公けにされ、日本の考古学史上に著名な遺跡として学界に周知されてきた。

本町遺跡が甲武鉄道国分寺駅の設置、国分寺村から府中町にいたる道路拡幅工事によって知られたのに対し、恋ヶ窪遺跡は、起因はともかく考古学的手法によって発掘され報告された。その後、本町遺跡が本格的な発掘調査を経ることなく伝承喧伝されてきたが、恋ヶ窪遺跡は太平洋戦争の終結後に多くの研究者によって調査が実施され、竪穴住居跡の発掘、多数の遺物出土によって縄文時代中期を中心とする大規模な集落遺跡であることが明らかにされてきた。

恋ヶ窪遺跡は、『日本石器時代地名表（第五版）』（1928）に、「戀ヶ窪。今村氏邸内」遺跡として井上昇二によって報告され、後藤守一（1937）をはじめ、松井新一（1947）、塩野半十郎（1948）などによって発掘されてきたが、吉田格『東京近郊石器時代集落案内』（1950）によって広く知られるにいたった。とくに、塩野が発掘した住居跡からの一括完形土器（30 数個体）が、吉田により武蔵野台地を中心として分布する縄文中期の加曾利ＥⅡ式として発表され（1957）、注目を集めることとなった。

その後、恋ヶ窪遺跡の中枢地域と推定されてきた日立製作所中央研究所の周辺一帯が宅地化される気運が生じたこともあって、国分寺市教育委員会は「恋ヶ窪遺跡調査会」（代表・永峯光一）を組織して（後、国分寺市遺跡調査会に統合）、1975 年以降、100 地点近くにも及ぶ発掘を実施し、『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ～Ⅷ』（1979 ～ 97）の報告書も公けにしてきた。

この度、第 94 次調査の報告を刊行するにあたり、改めて既往の発掘地点を精査して調査地を図上に記載し、恋ヶ窪遺跡の全体像を把握する基礎的資料を作成した。遺跡の中枢部分を占めていると推定される日立製作所中央研究所の敷地は、社の方針により、武蔵野の面影を良好に残している自然環境であり、発掘は必要最少限度を対象として実施した。その結果、縄文時代中期の集落遺跡の片鱗を見事に認識すると同時に、当該地周辺が中世の遺跡であることも再確認された。国分寺市の中世史さらに近世史にとって注目すべき地域であることが具体的に知られたのである。

調査地域の周辺は、近世の新田開発以前からの集落地であり、近世の恋ヶ窪村の生産のあり方を究明するにあたり、重要な中～近世の資料の埋没が推定されることになった。

幸いにして中央研究所の施設一帯は、社の先駆的慧眼によって自然環境が近代以前の姿で保全されている。今後とも、縄文時代の中期を中心とする大集落遺跡とともに中世から近世にかけての文化財を包含する稀有な地として注目されることは明らかである。

発掘調査の実施にあたりご高配を頂いた日立製作所中央研究所に対して、厚く感謝の意を表し、今後とも自然環境の保全と文化財の保護に御協力を願う次第である。

2016 年 3 月 31 日

国分寺市遺跡調査会
会長　坂詰秀一

例 言

1．本書は、東京都国分寺市東恋ヶ窪一丁目 280 番地内に所在する恋ヶ窪遺跡（国分寺市№２）第 94 次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、株式会社日立製作所中央研究所の委託を受けて、中央研究所構内純水設備付属建屋建設に伴う事前の記録保存調査として国分寺市遺跡調査会が実施した。発掘調査・出土品等整理作業・報告書作成にかかる経費は、株式会社日立製作所中央研究所が負担した。

3．発掘調査・出土品等整理作業・報告書作成作業は、下記の期間に実施した。

発掘調査	平成 27 年２月 18 日から３月 13 日まで
出土品等整理作業	平成 27 年４月１日から７月６日まで、９月１日から 25 日まで、10 月５日から 30 日まで、平成 28 年１月５・６日の間に断続的に実施。
報告書作成作業	平成 28 年１月 12 日から平成 28 年３月 31 日まで

4．発掘調査は、上敷領久（国分寺市教育委員会ふるさと文化財課史跡係）が担当し、国分寺市遺跡調査会の桂　弘美・藤崎　努・小池和彦・井上　翔・矢内雅之が作業に従事した。また、発掘作業の一部は、国分寺市シルバー人材センターへ委託し、青山達夫・伊藤直美が作業を補佐した。

5．出土品等整理作業・報告書作成作業は、依田亮一（国分寺市教育委員会ふるさと文化財課史跡係）が担当し、同課の増井有真・野中太久磨・寺前めぐみ・奥村直子、上敷領久（国分寺市教育委員会図書館課本多図書館）がこれを助けた。また、国分寺市遺跡調査会の桂　弘美・藤崎　努・小池和彦・平塚恵介・佐藤　令・岩田尋湖・冨澤　好が作業に従事した。

6．本書の編集・執筆は、坂詰秀一調査団長の指導のもと依田亮一が担当した。なお、出土した縄文土器については東京都埋蔵文化財センターの合田恵美子氏、石器については公益財団法人かながわ考古学財団の砂田佳弘氏より指導・助言を頂き、石器観察表は上敷領久が執筆した。

7．遺跡の略記号は「Ｋ２－94」とし、図面・写真や出土遺物の注記等はこの表記を用いた。

8．遺構の表記は、以下の略号を用いた。
炭化物・焼土集中：SC　溝：SD　竪穴住居：SI　土坑：SK　礫群：SR　集石：SS　石器集中部：ST
屋外埋甕：SU　性格不明遺構：SX　土坑墓：SZ　ピット：P

9．本書における挿図の縮尺およびスクリーントーンは、個別の図中に明記している。また、遺構平面図及び断面図で使用している標高は海抜高で、遺構平面図の国家座標は世界測地系座標である。

10．発掘調査における遺構等の測量はシステムプログラム「リプログラフ」（株式会社こうそく製）、また報告書の作成に際しては、Microsoft®Word®・Excel®、Adobe®Illustrator®・Photoshop®・Indesign® の各ソフトを用いた。

11．発掘調査における図面・写真等の記録類は、一括して国分寺市教育委員会で保管している。

12．発掘調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々から御指導ならびに御協力を賜った（敬称略）。
伊藤敏行・小田静夫・黒尾和久・合田恵美子・笹津備当・佐藤武志・渋江芳浩・杉藤篤志・砂田佳弘・田中　修・武川夏樹・野口　舞・藤波啓容・山崎和巳
株式会社日立製作所中央研究所・東京都教育庁地域教育支援部管理課・東京都埋蔵文化財センター・
公益財団法人かながわ考古学財団・森永建設株式会社・共和開発株式会社

目 次

序 …… i
例言 …… ii
目次・挿図目次 …… iii
表目次・写真図版目次 …… iv

第１章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1

第２章　遺跡地点をめぐる地理的・歴史的環境 …… 5
　第１節　遺跡の立地と地理的環境 …… 5
　第２節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 7

第３章　基本層序 …… 15

第４章　発見された遺構と遺物 …… 17
　第１節　中世以降 …… 17
　第２節　縄文時代 …… 19

第５章　結語 …… 27

写真図版
抄録
奥付

挿図目次

第１図　純水設備付属建屋の構造と発掘調査範囲 …… 2
第２図　調査地点位置図 …… 5
第３図　恋ヶ窪遺跡周辺の旧地形（昭和 28 年３月東京都事務局作成 1/3,000 地形図「国分寺地形」「国分寺」より） …… 6
第４図　調査地点と周辺の埋蔵文化財包蔵地 …… 8
第５図　恋ヶ窪遺跡・羽根沢遺跡・恋ヶ窪東遺跡付近の既往の発掘調査状況 …… 10
第６図　恋ヶ窪遺跡の既往の発掘調査地点位置図 …… 11
第７図　土層柱状図（調査区南西側南壁面） …… 15
第８図　恋ヶ窪遺跡第 94 次調査地点全体図 …… 16
第９図　中世の遺物 …… 17
第 10 図　溝 SD26 …… 18
第 11 図　ピット PJ １～４ …… 19
第 12 図　集石 SS30 …… 20
第 13 図　土坑 SK205J …… 20
第 14 図　縄文時代の遺物（１） …… 21
第 15 図　縄文時代の遺物（２） …… 22
第 16 図　縄文時代の遺物（３） …… 23
第 17 図　縄文時代の遺物（４） …… 24
第 18 図　旧恋ヶ窪村周辺の地籍図（昭和２年７月　国分寺村全図をトレース） …… 28
第 19 図　恋ヶ窪遺跡西側の竪穴住居分布 …… 29
第 20 図　恋ヶ窪遺跡東側の竪穴住居分布 …… 30

表目次

第１表　周知の埋蔵文化財包蔵地一覧表 …… 9
第２表　恋ヶ窪遺跡調査履歴表（昭和 49 年以降） …… 12
第３表　縄文時代土器・石器観察表 …… 25

写真図版目次

写真図版１
１．調査地点周辺の旧景観（1947 年 10 月 24 日米軍撮影）
２．調査地点周辺の現景観（1987 年撮影）
写真図版２
１．SD26 プラン確認状況（南から）
２．SD26 プラン確認状況（北から）
３．SD26　a-a’土層堆積状況（南から）
４．SD26 完掘状況（南から）
５．SD26　b-b’土層堆積状況（南から）
６．SD26　c-c’土層堆積状況（北から）
写真図版３
１．PJ-1 周辺遺物出土状況（東から）
２．PJ-1 周辺遺物出土状況（西から）
３．PJ-1 周辺遺物出土状況（北から）
４．PJ-1 土層堆積状況（南から）
５．SS30 検出状況（北から）
６．SS30 検出状況（北から）
７．SK205J 土層堆積状況
写真図版４
１．SK205J 全景（東から）
２．SK205J　P-1　土層堆積状況（西から）
３．PJ-2　土層堆積状況（南から）
４．PJ-3　土層堆積状況（東から）
５．PJ-4　土層堆積状況（東から）
６．旧石器時代試掘坑（西から）
７．調査着手前現況（南から）
８．表土掘削作業（北から）
写真図版５
中世の遺物
縄文時代の遺物（１）
写真図版６
縄文時代の遺物（２）
写真図版７
縄文時代の遺物（３）

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

昭和 17 年に故小平浪平社長が創業した株式会社日立製作所中央研究所（以下、日立中研と略）は、「10 年、20 年後を目標とする研究を行なうとともに、今日の課題にも取り組む」という理念を掲げ、社会イノベーションを軸とした日立グループの幅広い事業を支え、将来の社会ニーズを先取りする情報通信、エレクトロニクス、ライフサイエンス・計測技術の分野で新技術の創生に取り組んでいる事業所である。その敷地は、東京ドームの約５倍におよぶ約 20 万 7,000 ㎡を有し、「よい立木は切らずによけて建てよ」という同社長の意思を受けて、今でも武蔵野の面影を留めた貴重な自然が残されている地域を形成している。

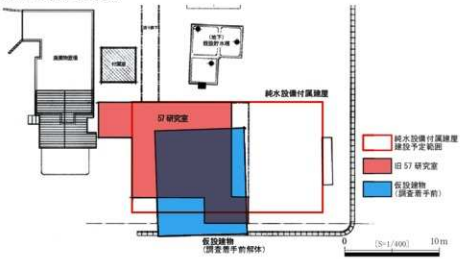
そのような中で、平成 26 年 12 月 24 日に株式会社日立建設設計（以下、施工者と略）から国分寺市教育委員会ふるさと文化財課（以下、市教委と略）へ、中央研究所構内で純水設備付属建屋の建設に伴う埋蔵文化財の取扱いについて照会が寄せられた。同建屋の建設予定地は研究所西側の一角に位置し、市内の埋蔵文化財包蔵地では「恋ヶ窪遺跡」（国分寺市№２遺跡）に該当する地点にあたる。市教委は、この東側近接地でも昭和 57・58 年と平成２年度に研究棟の建設に伴う事前の発掘調査を行っており（恋ヶ窪遺跡第 35・39 次調査）、縄文時代中期を中心とした竪穴住居等を確認していたことから、建物の設計内容によっては工事に先立ち発掘調査が必要となること、文化財保護法第 93 条に基づく埋蔵文化財発掘の届出が工事着手の 60 日前までに提出が必要であることを施工者側へ伝えた。

その後、平成 27 年１月 14 日付で施工者より同届出が市教委に提出された（国教教ふ収第 748 号）。届出に添付された建物の基礎構造は、地下埋蔵文化財への影響を極力考慮した布基礎構造で、長さ 2.0 m×幅 1.0 m×深さ 1.5ｍのコンクリート製フーチングを８箇所、フーチング間は深さ 95cm 付近に幅 50cm の地中梁で繋ぐ設計となっていたが、前述の第 35・39 次調査における標準土層厚は、表土が約 50cm、縄文時代の遺物包含層（Ⅲｂ層）がその直下約 30cm 程度の堆積状況であったことから、地中梁・基礎フーチング等の設置部分については遺跡への影響が及ぶ可能性が想定された。そのため、市教委は同月 19 日付で「工事等により埋蔵文化財が掘削されるため事前調査が必要である」ことの意見を付して東京都教育委員会（以下、都教委と略）へ届出を進達するとともに、施工者に対してもその旨を明記した埋蔵文化財協議書を返送した。

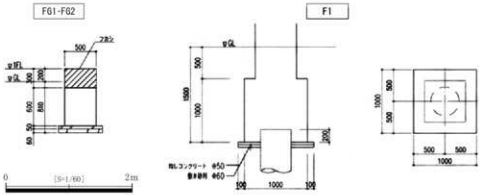
返送後は直ちに、工事に先立つ発掘調査実施に向けた調整を施工者と市教委間で開始した。市教委は、工事で遺跡に影響が及ぶ範囲を建物範囲 230 ㎡のうち上述箇所約 110 ㎡と想定し、近隣での既往の調査内容を参考として、発掘調査にかかる経費の積算を行った。その内容をもとに、２月９日には事業主である日立中研と市教委、および国分寺市遺跡調査会（以下、調査会と略）の３者間で発掘調査の契約、出土品譲渡の承諾等にかかる協議を経て、２月 13 日付で日立中研・調査会間で概算発掘調査経費 2,434,915 円（消費税８％含む）で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」（26 国遺調第 48 号）を締結した。なお、発掘調査は翌週 18 日から３月 13 日までの実働 18 日間で行う計画で、現地にはユニットハウスを設置し、電気・水道・トイレ等は施工者から提供を受けることにした。

ただし、純水設備付属建屋の建設予定地は調査開始直前まで仮設のプレハブ建物が存在し、それ以前には昭和 40 年代頃に地下室を有する鉄筋コンクリート造りの「旧 57 研究室」が建てられていた場所であり、特に調査対象地の西側は既に埋蔵文化財が滅失している可能性もあった（因みに、旧 57 研究室建設時には埋蔵文化財の発掘調査は行っていない）[注1]。そこで、バックホーで表土掘削作業を進めていく過程で、旧 57 号研究室建物基礎の遺存状況を並行して確認することにしたが、予想通り遺跡は撹乱されて

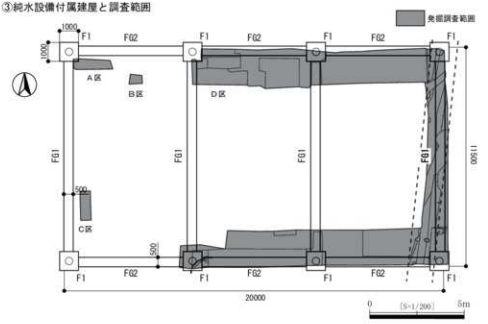
①純水設備付属建屋と前身建物



②純水設備付属建屋基礎フーチン断面模式図



③純水設備付属建屋と調査範囲



第１図　純水設備付属建屋の構造と発掘調査範囲

いたため、当該部分は発掘調査の対象からは除外した。その結果、最終的には敷地東側部分を中心とした面積 65.4 ㎡部分に絞ることとなり、作業員人件費・土木請負費等の執行に大きな変更要素が生じたため、現地での作業が終了した時点で再度経費の修正積算を行い、同年3月 30 日付で現地の発掘調査後に行う室内作業も含めた総額 2,373,534 円（消費税8％含む）で変更契約を取り交わした。合わせて、平成 28 年3月 31 日までに全体工期を延長し、その後の出土品等整理作業・報告書作成作業を行うことにした。

なお、文化財保護法第 93 条に基づく本工事の届出に対する東京都通知は、平成 27 年2月 13 日付 26 教地管理第 2714 号で「発掘調査」を行う旨の指導があり、本発掘調査終了後の「埋蔵文化財保管証」は3月 17 日付国教教ふ発第 171 号にて市教委から都教委へ提出し、4月 13 日付教地管理第 2714 号の2にて都教委から市教委宛に「埋蔵物の文化財認定」の通知を得ている。

発掘調査は、2月 13 日付の「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」の締結を受けて、翌日、調査会は直ちに準備工として土木支援業者へユニットハウスの設置を依頼し、18 日から現地入りした。表土は平爪 0.2 m3 仕様のバックホウを用い敷地西側から順次掘削を始めたが、前述のとおり、旧 57 研究室建物のコンクリート基礎が深く遺存し、遺跡は滅失していたことから、発掘調査の対象を結果的に当初予定の 200 ㎡から敷地東側の 65.4 ㎡に限定することとした。さらに、敷地東側部分にも、各所に給水・電気等の既設配管が巡っていることが判明し、盛土や旧耕作土を除去して現れる縄文時代の遺物包含層（Ⅲb 層）の遺存状況は、殊のほか劣悪なものであった。表土除去後のⅢb 層からは人力による掘削作業へ移行し、地中梁部分は設計 G L から－ 1.0 m、杭基礎部分は－ 1.5 m までの深さを調査の対象とすることにした。24 日から3月6日までは、後述する中世の溝状遺構、縄文時代の集石・土坑等の調査、その後9～13 日にかけて地中梁部分の遺物包含層掘削を行った。なお、埋蔵文化財の調査後はすぐに建設工事を控えていたことから、発生した残土は埋め戻さず、調査を完了した状況を日立中研・施工者・調査会・市教委の4者間で確認し、13 日中に用地の引渡しを済ませた。

その後、発掘調査費用の清算と、出土品等整理作業・報告書作成にかかる経費の積算を踏まえ、日立中研・調査会間で変更契約を取り交わし、翌年度から室内作業に着手した。出土品等整理作業については、4月1日より水洗・注記・分類・接合等の基礎整理作業、および遺構図面・写真の整理を進め、途中、作業の中断期間を経たが、10 月 30 日までに遺物の実測・拓本・トレース・遺物観察表・写真撮影・図版作成、および遺構図面のトレース・図版作成等の諸作業を終えた。その後、原稿執筆・編集作業を経て印刷業者へ印刷を発注し、翌年3月中には関係機関等への報告書の発送を済ませ、変更契約額にて清算を行った。

調査を受託した平成 26・27 年度の国分寺市遺跡調査会の体制は、次頁に掲げた通りである。

（注1）

昭和 28 年3月東京都事務局作成 1/3,000 地形図「国分寺地形」「国分寺」には、今次の調査地点付近に1棟のプラントが描かれている（第3図）。これは、「旧 57 研究室」の前身建物にあたり、『日立製作所中央研究所史1』によればボイラー室として利用されていた建物であったようである（株式会社日立製作所中央研究所 30 年史編さん委員会 1972）。

国分寺市遺跡調査会構成員名簿（平成 26・27 年度）

―――役員および監事―――

会　　長	坂誥秀一	国分寺市文化財保護審議会会長
副 会 長	星野亮雅	国分寺市文化財保護審議会副会長
理　　事	井澤邦夫	国分寺市長
理　　事	富山謙一	国分寺市教育委員会委員長
理　　事	松井敏夫	国分寺市教育委員会教育長
理　　事	北原　進	国分寺市文化財保護審議会委員
理　　事	遠藤慈郎	国分寺市文化財保護審議会委員
理　　事	福嶋　司	国分寺市文化財保護審議会委員
理　　事	鈴木正一	東京都教育庁地域教育支援部管理課長
専務理事	小山則夫	国分寺市教育委員会教育部長（平成 26 年度）
専務理事	本橋信行	国分寺市教育委員会教育部長（平成 27 年度）
監　　事	峯岸桂一	元国分寺市社会教育委員
監　　事	伊藤敏行	東京都教育庁地域教育支援部管理課統括課長代理

―――武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会―――

委 員 長	坂誥秀一	（考 古 学）立正大学名誉教授
委　　員	藤井恵介	（建 築 史）東京大学大学院工学系研究科教授
委　　員	佐藤　信	（古 代 史）東京大学大学院人文社会系研究科教授
委　　員	酒井清治	（考 古 学）駒澤大学文学部歴史学科教授
委　　員	松井敏也	（保存科学）筑波大学人間総合科学研究科准教授

―――事務局―――

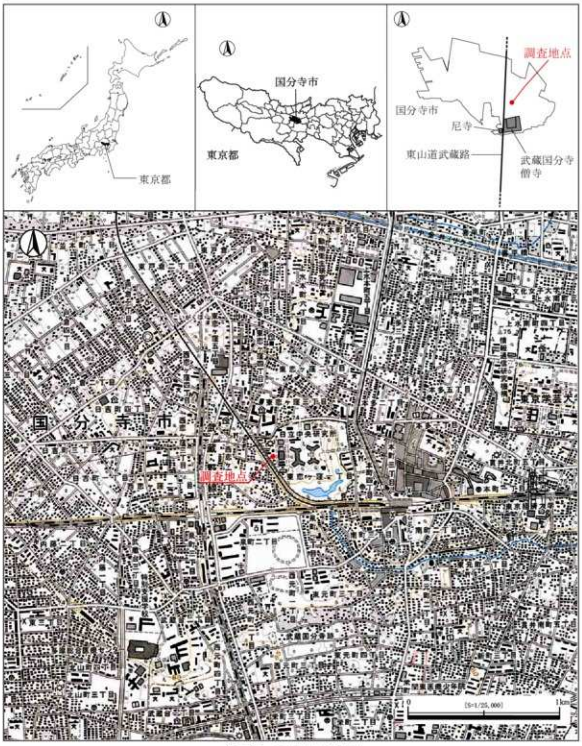
事務局長	島﨑進一	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課長
事務局員	豊泉早苗	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係長（平成 26 年度）
事務局員	松本　徹	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係長（平成 27 年度）
事務局員	井田美紀	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係嘱託(平成 26 年度)
事務局員	吉田澄音	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係嘱託(平成 27 年度)
事務局員	熊木正好	国分寺市遺跡調査会

―――調査団―――

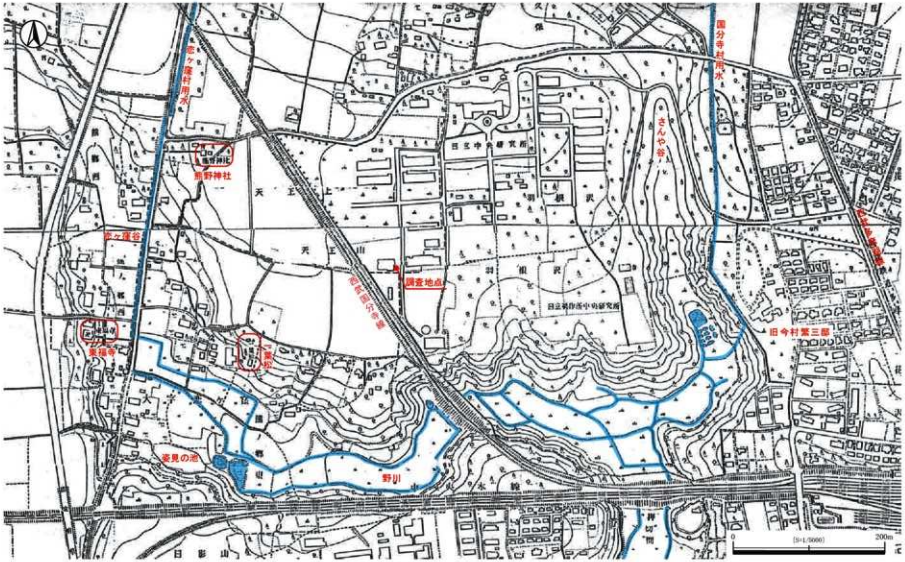
団　　長	坂誥秀一	立正大学名誉教授
主任調査員	依田亮一	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係長
調 査 員	上敷領久	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係主任（平成 26 年度）
調 査 員	中道　誠	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係
調 査 員	増井有真	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係
調 査 員	平山美由紀	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係嘱託（平成 26 年度）
調 査 員	島田智博	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係嘱託（平成 27 年度）
調 査 員	中元幸二	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係嘱託（平成 26・27 年度）

第２章　調査地点をめぐる地理的・歴史的環境

第１節　遺跡の立地と地理的環境



第２図　調査地点位置図



第３図　恋ヶ窪遺跡周辺の旧地形（昭和 28 年３月　東京都事務局作成１/3,000 地形図「国分寺地形」「国分寺」より）

調査地点は国分寺市東恋ヶ窪一丁目280番地内に所在し、国分寺駅からは西北西に約600mの距離を隔て、現在は株式会社日立製作所中央研究所構内の西辺部にあたる（第2図）。市域内の地形は、古多摩川が約4～7万年前に形成した通称「ハケ」と呼ばれる国分寺崖線を境として、大きくは上位の武蔵野段丘面と下位の立川段丘面とに区分され、その比高差は約7～15mを有するが、調査地点は武蔵野段丘面上に立地し、現況地盤の標高は約77mを測る。

国分寺崖線下には現在でも幾つかの湧水地点が存在し、それらの湧水が集まって野川を形成しているが、当該地周辺はその源流域一帯にあたり、市内に端を発して東流する河川は小金井・調布・三鷹の各市を通過して、世田谷区の二子玉川付近で多摩川へと合流し、その延長距離は約20kmに及ぶ。この野川源流域では、豊富な湧水群が武蔵野段丘の縁辺部を浸食して複数の開析谷が作られ、市内では東側から順に本多谷・殿ヶ谷戸谷・さんや谷・恋ヶ窪谷等が知られている。調査地点の周辺は、このうち東側をさんや谷、南から西側を恋ヶ窪谷に画された東西約600m、南北約400mの南側に張り出す舌状台地を呈し、台地のほぼ中央西寄りには西武国分寺線が南北に走り（第3図）、路線を挟んだ東側が中央研究所構内、西側が低層住宅地となっている。

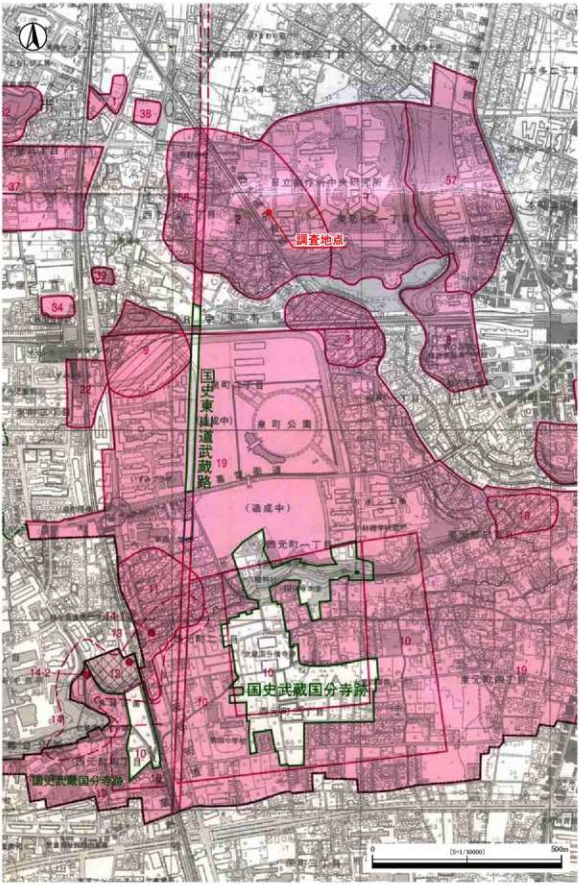
第2節　周辺の遺跡と歴史的環境

調査地点は、恋ヶ窪遺跡（国分寺市№2遺跡）として周知された範囲の一角にあたる。遺跡が占地する舌状台地は、中央の小支谷を介して西側が恋ヶ窪遺跡、東側が羽根沢遺跡に分かれ、さらに、さんや谷を挟んだ東側の台地面には恋ヶ窪東遺跡・花沢西遺跡、恋ヶ窪谷の南側台地面を恋ヶ窪南遺跡および日影山遺跡・武蔵国分寺跡北方地区、恋ヶ窪谷の北側を熊ノ郷遺跡としてそれぞれ周知しているが、これらの遺跡では野川源流域であるハケ下の豊富な湧水群を取り囲むように、旧石器・縄文時代の遺跡が発掘調査によって確認されている（第3・4図、第1表）。

このうち恋ヶ窪遺跡では、昭和12年に後藤守一が敷石住居を発見したことを嚆矢として、22年に国立高校考古学研究会が勝坂式期の住居跡、同年塩野半十郎が連弧文を主体とした加曽利E式期の住居跡を調査している。特に後者の調査では、1軒の竪穴住居から30個体もの完形・復元可能な土器群が出土し、後年、吉田格がこれらの資料を『銅鐸』誌上に紹介したことによって、恋ヶ窪遺跡が縄文時代の集落跡として著名になる契機にもなった。なお、これらの資料は、現在、東京国立博物館に塩野コレクションとして一括寄贈されている（松浦1984）。その後、39年には市営水道導水管工事に伴う松井新一らの調査、さらに同じ頃には国学院久我山高校も発掘調査を行っており（我孫子1979、吉田・横山1986）、遺跡の重要性が俄かに注目されることとなった。

ところが、昭和40年以降になると、西恋ヶ窪一丁目周辺では新興住宅建設が進出してきたことに伴って下水道敷設工事の計画が浮上し、昭和49年11月には工事に先立つ試掘調査が実施された（市教育委員会主体による恋ヶ窪遺跡の第1次調査）。その結果、施工範囲中11箇所に設けた試掘坑のうち8箇所で縄文時代中期の竪穴住居が発見されたため、市では昭和52年12月に恋ヶ窪遺跡調査会を組織し、以後、当該地周辺での開発に伴う埋蔵文化財調査需要に対応することとした（同組織は、平成14年に武蔵国分寺跡遺跡調査会と統合し、現在は国分寺市遺跡調査会と名称を変更している）。

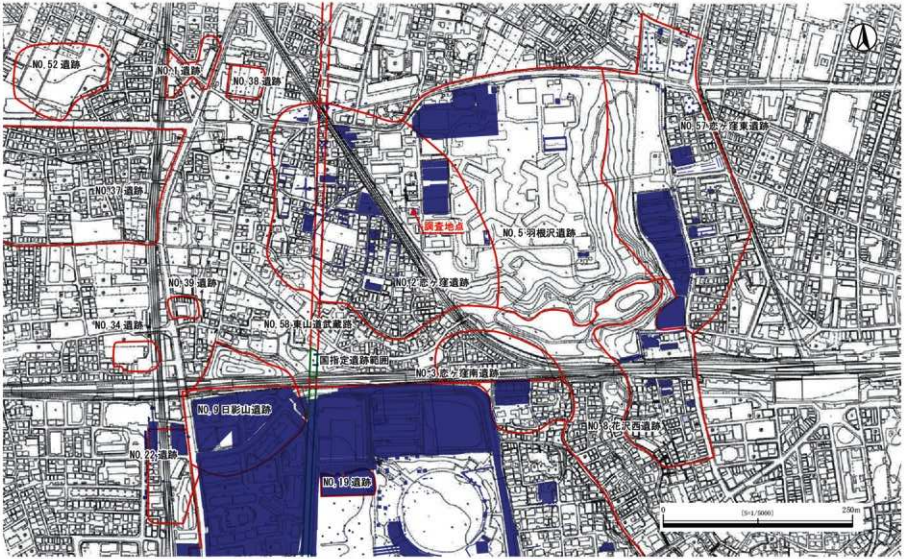
以後、恋ヶ窪遺跡では今次の調査で94地点目を数える（第5図、第2表）。これまでの調査原因を瞥見すると、個人宅造44件、下水道・道路等公共工事16件、分譲・集合住宅15件、学術調査15件、工場プラント建設4件の内訳で、個々の調査の大半が個人住宅や下水道敷設工事等に伴う狭小な発掘調査ばかり



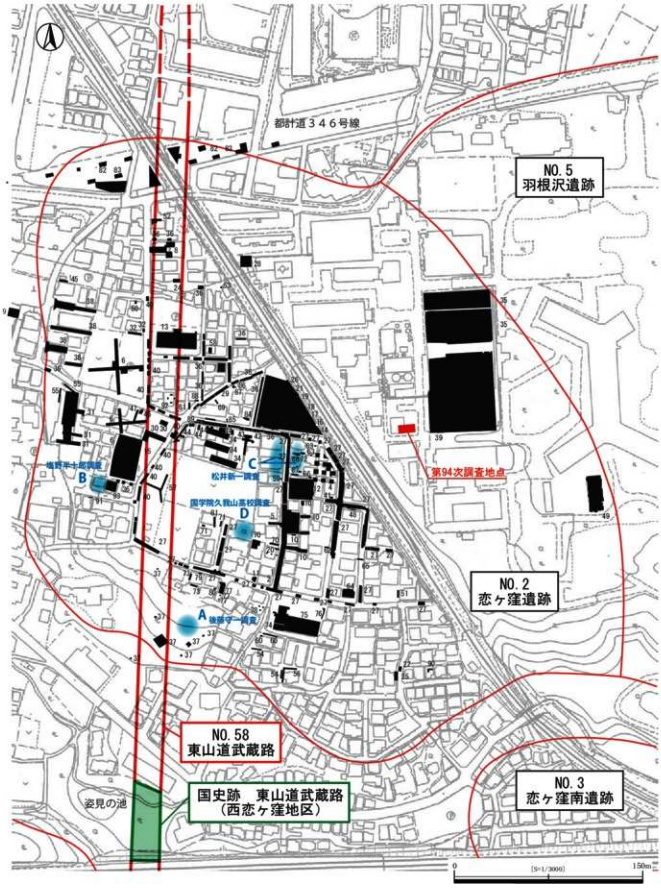
第４図　調査地点と周辺の埋蔵文化財包蔵地

第１表　周知の埋蔵文化財包蔵地一覧表

No.	名称	種別	所在地	時代
1	熊ノ郷遺跡	集落跡	西恋ヶ窪三丁目19 西恋ヶ窪四丁目1･6･7付近	旧石器･縄文
2	恋ヶ窪遺跡	集落跡	西恋ヶ窪一丁目3･10～27、28～30･47 東恋ヶ窪一丁目付近、三丁目20･21	旧石器 縄文(早･中･後期) 中世
3	恋ヶ窪南遺跡	集落跡	西恋ヶ窪一丁目1～3･5･51、東恋ヶ窪一丁目 泉町一丁目18･20～22、二丁目7付近	旧石器 縄文(早･中期)
5	羽根沢遺跡	集落跡	東恋ヶ窪一丁目付近	縄文(早･中期)
8	花沢西遺跡	集落跡	南町三丁目24･26～30 本町四丁目2～6 泉町一丁目14 東恋ヶ窪一丁目付近	旧石器･縄文
9	日影山遺跡	集落跡	泉町二丁目9 西恋ヶ窪一丁目8･34･35付近	旧石器･縄文(中期) 奈良･平安
10	武蔵国分寺跡 (僧尼寺)	寺院跡	西元町一丁目1･2･13～15 西元町二丁目1～7･11～14 西元町三丁目2～28 西元町四丁目1～5･9～11 東元町三丁目9･18～20 東元町四丁目6～10･19･20付近	奈良･平安
11	多喜窪遺跡	集落跡	西元町二丁目7～16 西元町四丁目10～12付近	縄文(中期)
12	伝祥応寺跡	寺院跡	西元町四丁目12付近	歴史
13		塚	西元町四丁目11付近	歴史
14	多喜窪横穴墓群	横穴墓	西元町二丁目8～11付近－1号墓 西元町四丁目10付近－２号墓	奈良
18	八幡前遺跡	集落跡	東元町三丁目12･14～16･24･25付近	縄文(中･後期)
19	武蔵国分寺跡	集落跡･道路跡	東元町三丁目1～25･31･33･34 東元町四丁目 西元町一丁目～四丁目 泉町一丁目5～11･18～21 泉町二丁目、三丁目3･16付近 西恋ヶ窪一丁目8	旧石器･縄文･奈良･ 平安･中世･近世
22	恋ヶ窪座寺跡	寺院跡	泉町三丁目17･27･30～33･35･36付近	縄文･平安～室町
37		散布地	西恋ヶ窪三丁目1～3･5～18付近	旧石器･縄文･奈良･平安
38		散布地	西恋ヶ窪一丁目49付近	縄文･奈良･平安
52		散布地	西恋ヶ窪三丁目26～31･33～36 日吉町四丁目12･13付近	旧石器
54	花沢東遺跡	集落跡	南町二丁目14～16･18 南町三丁目1･7～9付近	旧石器･縄文
57	恋ヶ窪東遺跡	集落跡	本町四丁目4～11･14～25 東恋ヶ窪一丁目、二丁目1･2付近	縄文(中期)
58	東山道武蔵路	道路跡	西恋ヶ窪一丁目8･9･15～18･24･25･47 東恋ヶ窪三丁目21	奈良･平安



第５図　恋ヶ窪遺跡・羽根沢遺跡・恋ヶ窪東遺跡における既住の発掘調査状況（青塗部が発掘調査箇所　※平成 27 年 12 月現在）



第６図　恋ヶ窪遺跡の既往の発掘調査地点位置図

第２表　恵ヶ窪遺跡調査履歴表（昭和49年度以降）

次数	年度	原因	調査内容	所在地	調査面積	発見された主な遺構	担当者	遺物箱数	文献
1	S49	市下水道	試掘調査	西恵ヶ窪1-19・20	36.0	SI2	安孫子		永峯他1979
2	S52	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1-19・21	180.0		安孫子	146	永峯他1979
4	S51	学術	確認調査	西恵ヶ窪1-20-14～16	110.0	SS1/SK4	安孫子	11	永峯他1980
5	S52	個人宅造	本調査	西恵ヶ窪1-19-10	20.0	SI3/SK1	安孫子	48	永峯他1980
6	S52	学術	確認調査	西恵ヶ窪1-17・25	337.0	SI1/SK2　歴史SZ1	安孫子	27	永峯他1980
7	S53	個人宅造	本調査	西恵ヶ窪1-23-16	24.0	SI3	広瀬	3	永峯他1980
8	S53	個人宅造	本調査	西恵ヶ窪1-24-35	100.0	SK2/P11　歴史SD2	広瀬	1	永峯他1980
9	S53	学術	確認調査	西恵ヶ窪1-187	60.0		広瀬		立川2007
10	S54	分譲住宅	本調査	西恵ヶ窪1-20	212.5	SI10/SS3/SK7/P11	広瀬	75	永峯他1982
11	S54	個人宅造	本調査	西恵ヶ窪1-19-2	16.0		広瀬	1	未報告
12	S54	学術	確認調査	西恵ヶ窪1-20	264.0	SI3/SI3/SS5/SK17	広瀬	70	滝口他1988
13	S55	集合住宅	本調査	西恵ヶ窪1-24-16	378.0	SS1/SK3/P55　歴史SD1/SK6	広瀬	6	滝口他1988
14	S55	学術	本調査	西恵ヶ窪1-22	366.0	SI18/SK1	広瀬	60	上敷領他1991・2008
15	S56	集合住宅	本調査	西恵ヶ窪1-17-24	640.0	ST2/SI2/SK8　旧石器1層	広瀬	3	滝口他1988
16	S56	学術	本調査	西恵ヶ窪1-22	163.0	SI6	広瀬	28	上敷領他1991・2008
17	S57	学術	本調査	西恵ヶ窪1-22	220.0	SI6/SX53	広瀬	40	上敷領他1991・2008
18	S57	学術	本調査	西恵ヶ窪1-22	220.0	SI8/SX4	広瀬	40	上敷領他1991・2008
19	S59	学術	本調査	西恵ヶ窪1-22	240.0	SI9/SX1	広瀬	65	上敷領他1991・2008
20	S59	個人宅造	本調査	西恵ヶ窪1-19-5	2.6		広瀬	1	未報告
21	S60	学術	本調査	西恵ヶ窪1-22	243.5	SI9/SX2	広瀬	52	上敷領他1991・2008
22	S60	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1-13	6.0	SS1	広瀬	4	吉田他1996
23	S60	市下水道	試掘調査	西恵ヶ窪1	722.0		広瀬	6	吉田他1996
24	S61	個人宅造	本調査	西恵ヶ窪1-24-23	17.0	P3	広瀬	1	未報告
25	S61	個人宅造	本調査	西恵ヶ窪1-13-1	14.0	SS1	広瀬	2	未報告
26	S61	学術	本調査	西恵ヶ窪1-22	222.0	SI6	広瀬	25	上敷領他1991・2008
27	H1	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1-167先	296.3	SI3/SK1/P15	広瀬	32	吉田他1996
27	H2	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1-167先	63.2	SI10/SS4/SK8/P44	上村	10	吉田他1996
27	S61	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1-167先	185.0	SI9/SI1/SS2/SK16/P63	広瀬	9	吉田他1996
27	S62	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1-167先	295.0	SI7/SK25/P98　歴史SD1	広瀬	13	吉田他1996
27	S63	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1-167先	206.7	SI1/P54	広瀬	33	吉田他1996
28	S62	鉄塔建設	本調査	西恵ヶ窪1-210・217	142.1	P2	広瀬	1	未報告
29	S62	個人宅造	本調査	西恵ヶ窪1-224-3	3.1	SI1	広瀬	2	未報告
30	S62	学術	本調査	西恵ヶ窪1-171	81.4	SI1/P10　歴史SD2	広瀬	14	未報告
31	S63	学術	本調査	西恵ヶ窪1-171	128.7	ST1/SK3/P10　旧石器・中近世陶磁器	広瀬	1	未報告
32	H1	個人宅造	本調査	西恵ヶ窪1-25-4	18.7		広瀬		立川2009
33	H1	市下水道	試掘調査	西恵ヶ窪1丁目地内	2712.0		広瀬		未報告
34	H1	学術	本調査	西恵ヶ窪1-18-9～11	216.0	SI10/SS1/SK4	広瀬	21	未報告
35	H2	プラント	本調査	東恋ヶ窪1－280地内	1678.0	SI3/SS2/SK9/P61	広瀬	66	星野他1992
36	H2	市下水道	試掘調査	西恵ヶ窪1丁目地内			上村	1	吉田他1997
36	H2	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1丁目地内	114.0	SI11/SS1/SK1/P74　歴史SK4	上村	18	吉田他1997
36	H3	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1丁目地内	333.9	SI13/SK2/P8　歴史SD3	上村	55	吉田他1997
36	H4	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1丁目地内	173.3	SI10/SK7/P39　歴史SD1/SK1	上村	15	吉田他1997
37	H2	学術	本調査	西恵ヶ窪1-15-2・4・23～25	79.7	SI1/SK1	上村	1	未報告
38	H3	公共工事	本調査	西恵ヶ窪1-26-1・16	275.0	歴史SD1	上村	1	未報告
39	S57	プラント	本調査	東恋ヶ窪1－280地内	1077.0		広瀬		星野他1992
39	S58	プラント	本調査	東恋ヶ窪1－280地内	2653.1	SI7/SS1/SK17/P154	広瀬	43	星野他1992
40	H3	市下水道	試掘調査	西恵ヶ窪1丁目地内	538.2		上村	2	吉田他1997
40	H4	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1丁目地内	89.5	SI1/P2　歴史SD4/SK2	上村	2	吉田他1997
40	H5	市下水道	本調査	西恵ヶ窪1丁目地内	187.6	SI5/SK1/P8　歴史SD4	上村	5	吉田他1997
41	H4	個人宅造	本調査	西恵ヶ窪1-20-13	4.0	SI2	上村	1	未報告
42	H4	個人宅造	本調査	西恵ヶ窪1-18-9	8.8	P13	上村	2	未報告
43	H4	集合住宅	本調査	西恵ヶ窪1-18-9	21.3	P28	上村	3	未報告
44	H4	分譲住宅	本調査	西恵ヶ窪1-18-11・12	57.6	SI7/SK3/P3	上村	20	未報告

次数	年度	原因	調査内容	所在地	調査面積	発見された主な遺構	担当者	遺物箱数	文献
45	H5	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-26-3	5.8		上村		立川2009
46	H5	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-17-44	3.6		上村	1	未報告
47	H5	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-17-36・37	8.3	P4	上村	1	未報告
48	H5	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-21-20	4.0	P4	上村	1	未報告
49	H5	プラント	本調査	東恋ヶ窪1-280	141.2	P9	上村	1	未報告
50	H6	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-25-7	2.0		上村		立川2009
51	H6	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-21-4	4.0	S11	上村	1	未報告
52	H7	分譲住宅	本調査	西恋ヶ窪1-24-43	7.4	歴史SD1	上村		未報告
53	H7	個人宅造	本調査	東恋ヶ窪1-23-33	1.0		上村		立川2009
54	H7	集合住宅	本調査	西恋ヶ窪1-14-10・13・31	10.6		上村		未報告
55	H7	集合住宅	本調査	西恋ヶ窪1-28-1他	316.5	ST1/SK1/P2	上村	1	未報告
56	H7	集合住宅	本調査	西恋ヶ窪1-14-10・11	18.5	SK1/P1	上村	1	未報告
57	H7	公共工事	本調査	西恋ヶ窪1-18	46.2	P4　歴史SD2	上村	1	未報告
58	H7	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-22-21	10.3		上村	1	未報告
59	H8	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-19-15	1.0		上村		立川2009
60	H8	分譲住宅	本調査	西恋ヶ窪1-14-10・28	5.3	旧石器群群IVI層	上村	1	未報告
61	H8	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-24-2	5.0	SU1/SK1/P10	上村	1	未報告
62	H8	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-20-6	1.6		上村		立川2009
63	H10	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-20-48	0.7	P1	上村	1	未報告
64	H10	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-21-25	1.4		上村	1	未報告
65	H10	集合住宅	本調査	西恋ヶ窪1-11-3	3.0		上村	1	未報告
66	H11	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-20-55	5.6	SK1	上村		未報告
67	H11	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-20-54	2.7	SK1/P1	上村	1	未報告
68	H11	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-20-53	4.9	SK6/P2	上村	1	未報告
69	H11	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-22-9	6.4	S11	上村	1	未報告
70	H12	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-19-6, 7, 8	35.1	SS1/SK4/P7	上村	2	未報告
71	H12	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-18-31, 32	6.0	SK1/P2	上村	1	未報告
72	H12	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-20-47	3.4	SK1	上村	1	未報告
73	H12	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-15-26, 28	7.9	S11	上村	1	未報告
74	H13	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-14-9, 33	34.0	P5　歴史SD2	上村	1	未報告
75	H13	集合住宅	本調査	西恋ヶ窪1-14-9, 33	369.4	SS4/SK3/P51　歴史SD1/SK3	上村	19	未報告
76	H16	道路工事	確認調査	西恋ヶ窪1-15-13, 25	66.7	P3　歴史SD2	上村	1	未報告
77	H16	道路工事	本調査	西恋ヶ窪1-15-13, 25	66.7	SK2　歴史SD2	上村	1	未報告
78	H16	集合住宅	確認調査	西恋ヶ窪1-15-30, 31	5.3		上村		上敷領2008
79	H16	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-15-34	1.0		上村		上敷領2008
80	H16	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-15-35	1.0		上村		上敷領2008
81	H18	分譲住宅	確認調査	西恋ヶ窪1-20-10	7.2	歴史SD1/SK1/P3	立川	1	立川2008
82	H19	公共工事	確認調査	西恋ヶ窪1-47、東恋ヶ窪3-21	386.5	ST1　歴史SK1/SF1帝SD2	小野本	1	小野本2008
83	H19	公共工事	本調査	西恋ヶ窪1-47、東恋ヶ窪3-21	366.6	SC3/P1　歴史SD2/P5	小野本	1	小野本2008
84	H21	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-22-15	10.0	P5　歴史SD2	小野本	1	立川2011
85	H21	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-22-18	2.3	SK1/P2	立川	1	立川2011
86	H21	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-22-19	3.8	S11/SK1/P1	小野本	1	立川2011
87	H21	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-22-16	4.0	S11/SK1	小野本	3	立川2011
88	H23	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-25-40	7.4		小野本	0	寺前他2012
89	H23	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-18-16	8.0	S11/SK1	寺前	1	寺前他2012
90	H23	分譲住宅	確認	西恋ヶ窪1-1282-28	3.8		寺前	0	寺前他2012
91	H24	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-17-1	3.6		中道	0	上敷領他2013
92	H24	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-24-12	13.9	S11　歴史SD1	中道	2	上敷領他2013
93	H25	個人宅造	本調査	西恋ヶ窪1-17-11	44.3	S11	中道	2	上敷領他2014
94	H26	プラント	本調査	東恋ヶ窪1-280地内	65.4	SS1/SK1　歴史SD1	上敷領	4	本書

であるが、それでも調査総面積は累積すると 18,593 ㎡に及び、発見された遺構は 48 次調査までの集計結果（上敷領他 1991・2008）からその後の調査成果を加算し、縄文時代の竪穴住居 158 軒、土坑 219 基、集石跡 35 基の他、屋外埋甕や多数のピットが検出されたことになる。これは、平成２～８年度に都営本町四丁目団地の建替工事に伴い 12,643 ㎡の面積を対象として、竪穴住居 189 軒、掘立柱建物５棟、集石・集石土坑 61 基、土坑 341 基、屋外埋甕７基が発見された恋ヶ窪東遺跡第７・９次調査（坂誥・上敷領 2003）とともに、野川源流域における縄文時代の生活様相を探るうえで極めて重要な考古学資料が得られた成果といえる。

また、昭和 53 年度の第８次調査、55 年度の 13 次調査では、２条の溝が約 12 m の距離を隔てて並走する状況が判明したが、以後、27・30・36・40・57・82・83・92 次調査の各地点でも同規模の溝がほぼ南北に一直線状に延びていることが確認された。これらは、後に武蔵国分寺僧尼寺間を縦貫する東山道武蔵路の道路側溝が、寺域のはるか北側にあたる恋ヶ窪遺跡の範囲の中にも延長していることが明らかとなったもので、遺跡の中央やや西寄りに位置する当該範囲は、「恋ヶ窪遺跡」とは別に「東山道武蔵路（国分寺市№ 58 遺跡）」としても２重に周知している。なお、JR 中央線北側際の恋ヶ窪谷に所在する姿見の池周辺では、平成９年度に武蔵国分寺跡第 457・458 次調査として確認調査を実施し、東山道武蔵路が版築を伴う敷粗染工法を用いた特異な道路構造を呈していたことも判明している（上村 1999）。

ところで、現在の国分寺市域は、明治 22 年に江戸時代の旧 10 ヶ村が合併して形成された範囲だが、このうち８ヶ村は享保期以降に成立した新田村落で、武蔵国分寺がある国分寺村と本遺跡を含む恋ヶ窪村の２ヶ村は、それより以前から存在していた旧村であった。しかし、両村ともに存立時期の詳細は不明で、市域一帯の中世史料は総じて少ないが、道興准后が文明 18（1486）年に東国を回遊して著した紀行文『廻国雑記』には、「恋ヶ窪といへる所にて　朽ちはてぬ　名のみ残れる恋がくぼ　今はたとふも　契ならずや」の記載があり、道興一行が巡行する以前の恋ヶ窪界隈は繁栄していた様子を窺い知れる。この点については、恋ヶ窪村の旧跡「傾城の松（一葉松）」の由緒略説として、畠山重忠の悲恋に纏わる姿見の池の伝承が残されており、鎌倉時代初期には奥州往還（現府中街道）に沿って宿場町として栄えていた内容を伝えているが、本伝承は近世後期の『新編武蔵風土記稿』や、明治６年に書かれた『数目調書』等によるもので、その歴史的な信憑性については検討が必要である。そのようななかで、恋ヶ窪遺跡第６次調査地点では地下式壙が１基確認され（永峯他 1982）、同地点からは 13 世紀末の常滑甕や鉄製刀子が出土しており、また、包蔵地の範囲外であるが日影山北側の畑地からは 15 世紀末の古瀬戸灰釉花瓶が表採されるなど（有吉 1986）、極めて断片的ながらも中世に関わる発掘資料も得られている（第 18 図）。

近世の恋ヶ窪村については後述するが、今次の調査地点一帯は、集落域から外れて畑地が広く展開していた場所で、大正７（1918）年には今村銀行の頭取であった今村繁三が田畑農地を買収して現在の本町都営住宅地に別邸を設け（第３図）、川越鉄道（現西武国分寺線）からさんや谷に至るまでの広大な敷地には仮楽園と呼ばれる農場を営んでいた。さらに、昭和 17 年以降には、日立製作所が仮楽園を受け継ぎ、中央研究所を開設して今日に至っているが、その頃から敷地内の各所にプラントが設けられるようになった（写真図版１－１）。なお、調査地点は、昭和２年の国分寺村全図（第 18 図）と対比すると、当時の地籍では北多摩郡国分寺村大字恋ヶ窪字天王上 228・229 番地付近にあたり、プラントが進出する以前には畑地として利用されてきた場所であったことが判る。

第３章　基本層序

国分寺市域における武蔵野段丘面上の遺跡では、大よそ下記の層序区分を用いているが、本調査地点の様相をそれらと対比しつつ、以下に整理する。

Ⅰ層　表土層。本地点では、以下の３層に細分される。

Ⅰａ層　コンクリート瓦礫を含む盛土層。

Ⅰｂ層　暗褐色土（旧表土）。畑の耕作土で、全体的に締まりは弱い。

Ⅰｃ層　旧表土。Ⅰｂ層とⅡ層土（黒色土）をそれぞれブロック状に含んでいる。

Ⅱ層　黒褐色土。東側に約 10 数ｍ距離を隔てて隣接する、恋ヶ窪遺跡第 39 次調査地点（昭和 57 年度）では検出されているが、本調査地点では明確な堆積層として捉えられなかった。粒子は粗く、ボソボソとしていて粘性に乏しい。歴史時代の遺構覆土を構成する。

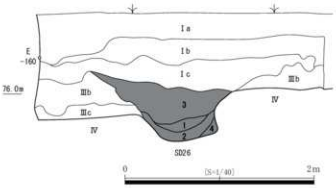
Ⅲ層　暗茶褐色土。以下の３層に細分される。

Ⅲａ層　暗茶褐色土。粒子はやや粗く、粘性に欠ける。Ⅱ層とⅢｂ層の中間的な特徴を有する。本地点では明確ではない。

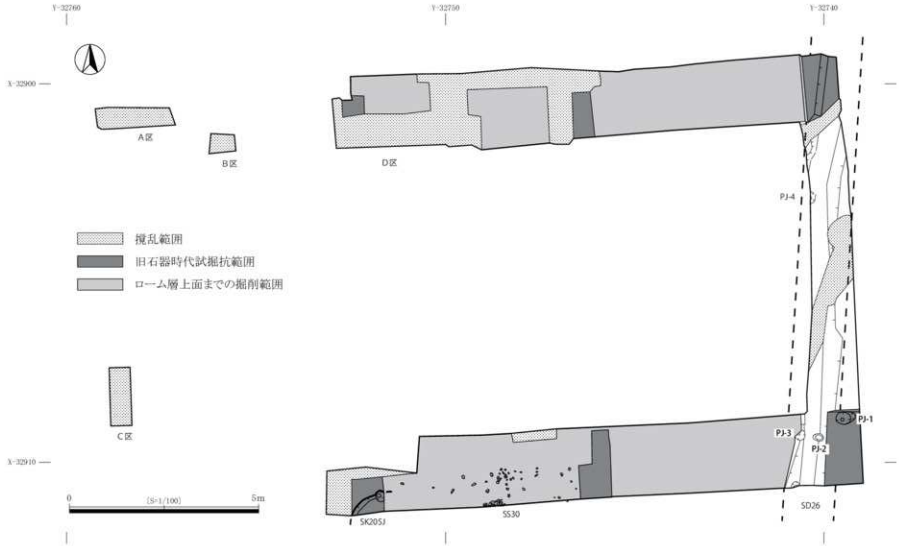
Ⅲｂ層　暗茶褐色土。下部に行くほど褐色味が強くなる。縄文時代の遺物包含層。Ⅲｂ層中で第 16 図 21・22、28 の土器が出土している。

Ⅲｃ層　茶褐色土。Ⅲｂ層とソフトローム層との漸移層。縄文時代の遺物包含層。本層上面で縄文時代の遺構が検出し易くなる。

Ⅳ層　黄褐色土。ソフトローム層。武蔵野台地上の遺跡で一般的に用いられる層序区分では「Ⅲ層」に相当する。



第７図　土層柱状図（調査区南西側南壁面）



第８図　恋ヶ窪遺跡第94次調査地点全体図

第４章　発見された遺構と遺物

第１節　中世以降

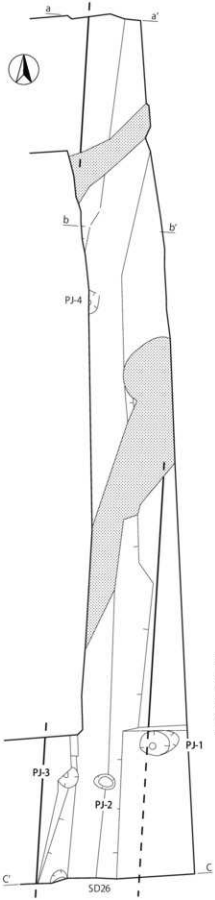
当該期の遺構は、発掘現場では時期等の詳細を掴めきれていなかったが、出土品等整理作業を進める過程において出土遺物中に後述する中世陶器が２点確認され、また土層断面図も精査した結果、現地での解釈を一部修正する必要が生じ、縄文時代の記述と切り分けて報告することとした。

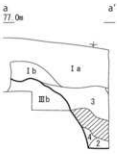
発見された遺構は溝１条（SD26）とピット４基（PJ1～4）である（第10図・写真図版２）。調査区東際で検出された南北方向に走行する溝状遺構は、当該部分にコンクリート製の建物基礎やガス・排水管等の攪乱が複雑に入り組んでいたため、遺構の全体把握には当初から難渋した。そのため、調査区北・南壁面での堆積土層を観察すると、本来は深さ約80～90cm以上の掘込みを有する溝であることが判るが、平面的には溝底面から約25cm前後のレベルでしかプランを把握することが出来なかった。また本溝は、現地での調査時点では縄文時代の遺構として記録を留めていたものであったが、第10図断面Ｃ－Ｃ‘での土層観察状況を見ると、縄文時代の遺物包含層であるⅢｂ層を切り込んでいることに加えて、覆土の直上には表土（Ⅰｃ層）が窪んだ堆積状況を示していることが判る。よって、Ⅰｃ層に類似した土が溝の覆土最上部を形成していると観察すべきで、遺構の年代も歴史時代以降の所産として捉えた方が良いであろう。その際、参考となるのは東側トレンチ付近の表土中からは出土した常滑甕で、それよりも新しい時期の遺物は他に含まれていないため、本遺構は中世に帰属する可能性が高いものと思われる。

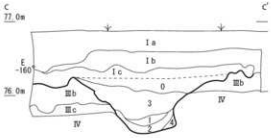
検出した溝SD26は、南北約11.5ｍの延長距離をはかり、主軸はＮ－４°－Ｅに触れながらもほぼ直線状に走行し、南と北はそれぞれ調査区の外側へと延びている。規模は上面幅2.1ｍ、底面幅0.4ｍ、深さ0.8～0.9ｍで、壁はやや外開きに立ち上がる。底面レベルは調査区北端が75.33ｍ、南端が75.55ｍで、南から北に向かって溝底が低く傾斜している様子である。覆土は下層付近にロームブロック主体の茶褐色土が堆積している以外は、全体的に締まりの弱い黒褐色土で、掘り方の形状や覆土の堆積状況からは流水・湛水の痕跡や、掘り返し等の行為は認められなかった。また、主に調査区南側付近を中心に暗茶褐色土の覆土を有する小ピットが溝底から立ち上がり壁にかけて４基発見された（PJ1～4）。これらも調査時は縄文時代のピットとして記録したが、覆土の類似性から判断して溝に付帯する施設の可能性を考え、本節で報告することとした。

遺物は溝覆土中からではないが、付近の表土層中から常滑陶器が２点出土している（第９図・写真図版５）。いずれも胴部破片であり時期の特定は困難であるが、色調は赤茶色で、小礫を多く含む粗い胎土を有し、14～15世紀代の常滑甕の様相に似た印象を持つ。その他、覆土中からは縄文土器片が数点出土している。これまで日立中央研究所構内で行われた調査では、中世の遺構は発見されておらず、当該期の土地利用が確実に存在することが判っただけでも大きな成果と言えそうである。

第９図　中世の遺物







SD26

0．Ⅰc層別以の土層　Ⅰc層と視覚的に分層が困難。

1．暗黒褐色土　細ローム粒やや多く、赤色スコリア・炭化物を微量含む。粘性あり。締まり弱い。

2．暗黒褐色土　大粒のローム粒を多く含み、Ⅲb ブロック・炭化物を少量含む。粘性あり。締まり弱い。

3．暗茶褐色土　赤色スコリアをやや多く含み、細ローム粒を少量含む。粘性なし。締まりややあり。

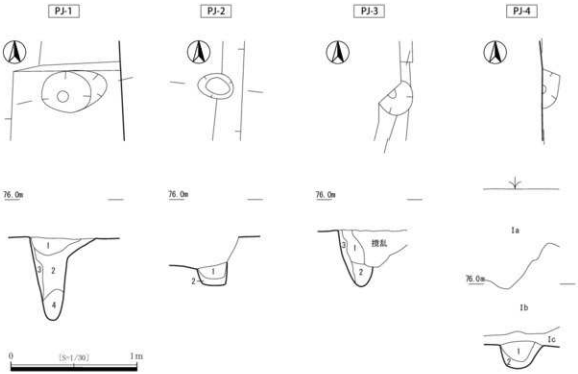
4．茶褐色土　細ローム粒・ローム土を多く含み、炭化物を少量含む。粘性なし。締まりなし。

根撹乱

撹乱範囲

0　(S=1/50)　2m

第10図　溝SD26



PJ-1

1. 暗茶褐色土　赤色スコリア、細ローム粒多く含み、炭化物微量含む。粘性・締まりあり。
2. 茶褐色土　ローム粒・ローム土を多く含み、赤色スコリア・炭化物を少量含む。粘性・締まりあり。
3. 茶褐色土　ローム土を多く含む。炭化物を微量含む。粘性・締まりあり。
4. 暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。

PJ-2

1. 茶褐色土　赤色スコリア・ローム土をやや多く含む。粘性・締まりあり。
2. 暗黄褐色土　ローム土・ロームブロックをやや多く含む。粘性・締まりあり。

PJ-3

1. 暗茶褐色土　赤色スコリア・細かいローム粒を多く含み、炭化物を少量含む。粘性・締まりあり。
2. 茶褐色土　ローム土・ローム粒を多く含み、赤色スコリア・炭化物を少量含む。粘性・締まりあり。
3. 茶褐色土　ローム土主体に含む。粘性・締まりなし。

PJ-4

1. 暗茶褐色土　赤色スコリア・ローム土を少量含む。炭化物を微量含む。粘性・締まりあり。
2. 茶褐色土　ローム土・ロームブロックをやや多く、炭化物を微量含む。粘性・締まりあり。

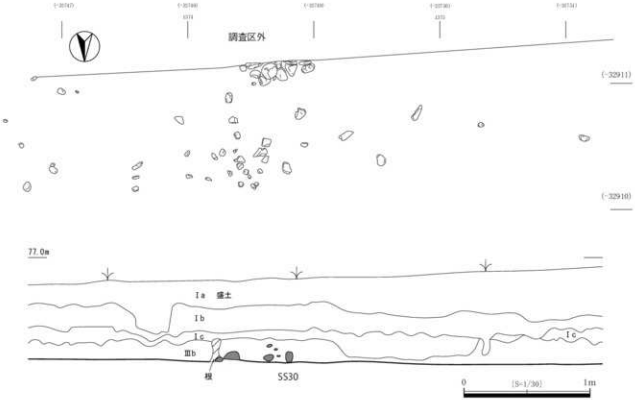
第11図　ピットPJ1～4

第２節　縄文時代

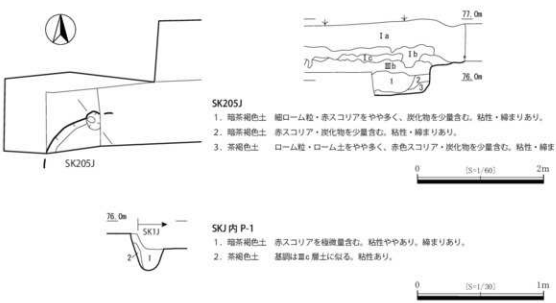
今次の調査地点から道路を隔てて 10 m東側は、昭和 57・58 年および平成２年度に恋ヶ窪遺跡第 35・39 次調査として発掘調査が行われ、北側の 35 次調査では勝坂式期を主体とする竪穴住居２軒、集石跡２基、土坑９基、ピット 61 基が、南側の 39 次調査では竪穴住居７軒、土坑 17 基、礫集中範囲１面、ピット 154 基が発見されている（星野他 1992）。特に今次の調査地点に近接する 39 次調査範囲の南西側は、竪穴住居が密集する検出状況であったことから（第 20 図）、この様相が調査区まで続くものと予測して臨んだが、前述のとおり、既存建物基礎等による撹乱が著しく、集石１箇所、土坑１基のみの検出に留まった。

集石 SS30 は、調査区南側中央付近でⅢｂ層下部から発見された（第 12 図）。その範囲は、東西約 4.5 m、南北は約 1.0 mであるが、南側はさらに調査区の外側へも広がっている模様である。当該範囲からは、ほぼ同一レベル上で計 53 個の礫が出土した。大きさは３～ 13cm 大と様々だが、４～７cm 大の砂岩が主体を占め、このうち 40 点は被熱により赤化していた。また、第 17 図 66 の打製石斧、68 の叩石、69 の磨石も含まれていた。

土坑 SK205J は調査区南側で、集石 SS30 の西側付近から発見された（第 13 図）。Ⅲｂ層を取り除き、ソ



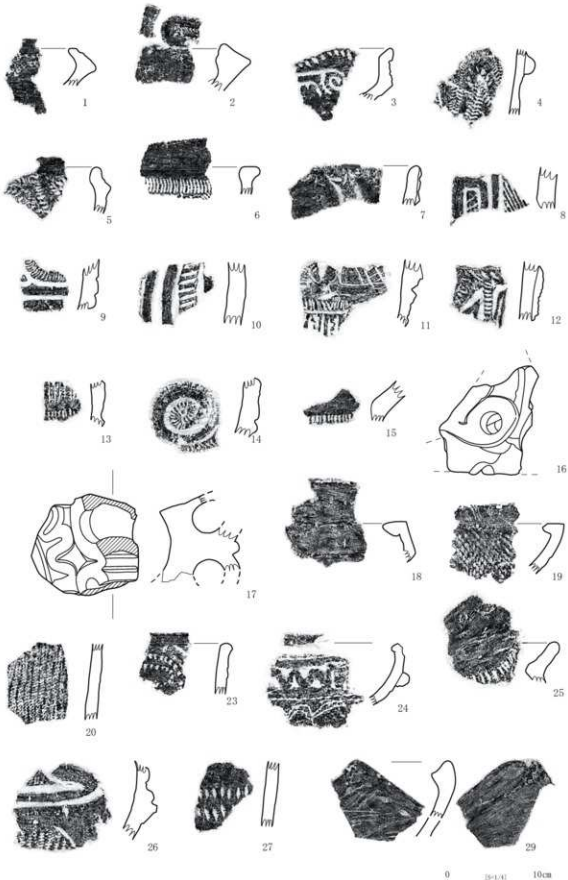
第12図　集石SS30



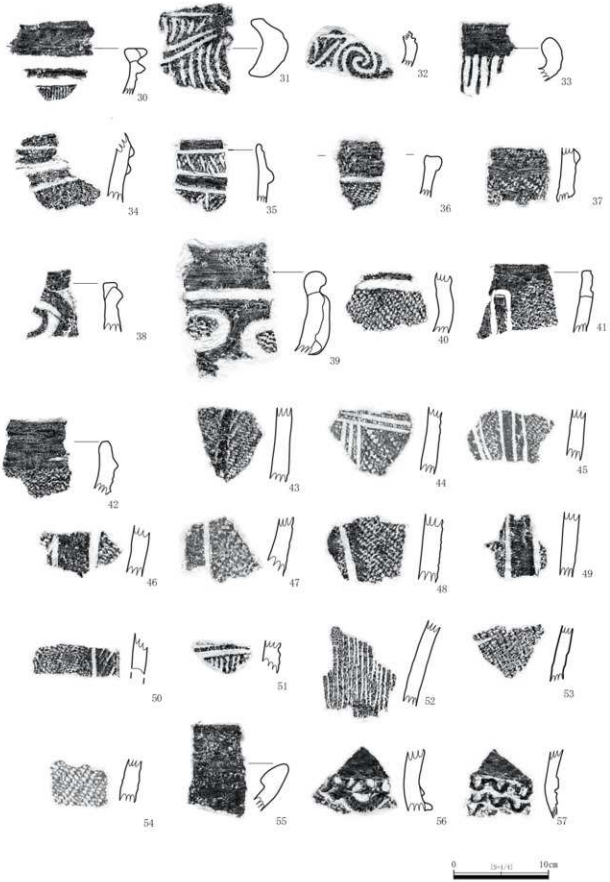
第13図　土坑SK205J

フトロームとの漸移層であるⅢc層上面でプランを確認したが、工事計画の掘削深度の関係から部分的な検出に留まり、全体の形状は明らかにし得なかった。確認面から底面までは約35cmをはかり、炭化物を少量含む茶褐色土主体の覆土を有する。調査した範囲内からは遺物は出土していない。

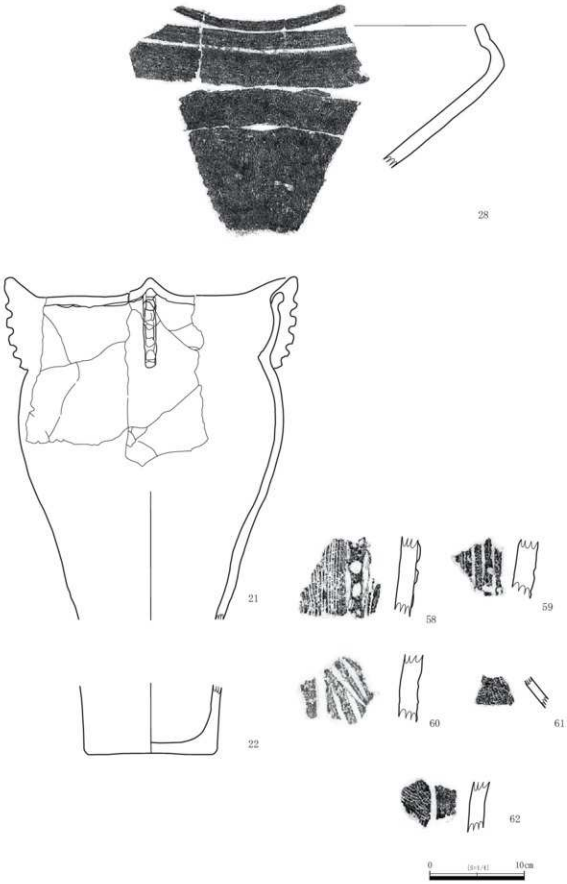
縄文時代の遺物は集石の礫を除くと412点を数え、表土層から79点、Ⅲb層（SD27含む）から333点の内訳で、東・南側トレンチ付近で出土したものが目立った。このうち、第14～17図に掲げた土器62点、石器8点の計70点を図化した。出土土器は縄文時代中期中葉～後葉の勝坂・加曽利E式期が主体で、



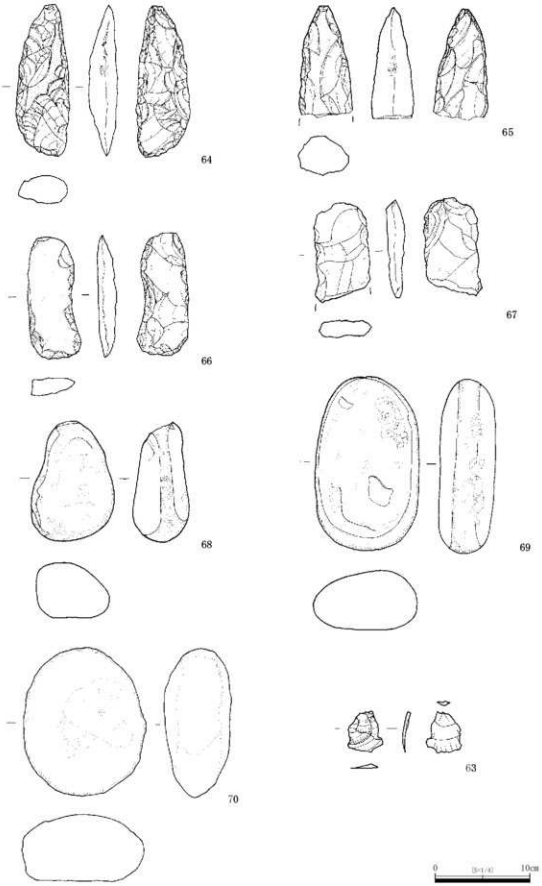
第 14 図　縄文時代の遺物（1）



第 15 図　縄文時代の遺物（2）



第 16 図　縄文時代の遺物 (3)



第 17 図　縄文時代の遺物（4）

第３表　縄文時代土器・石器観察表

No.	器形	器形の特徴・部位・文様構成／石材・法量・特徴等
1	浅鉢	口縁部片。くの字形に屈曲。口縁部に単列の角押文による文様を施文する。Ⅲ層出土。勝坂１式。
2	浅鉢	口縁部片。くの字形に屈曲。隆帯による楕円状の区画内外に、隆帯に沿って三角押文を施文する。Ⅲ層出土。勝坂１式。
3	浅鉢	口縁部片。波状口縁で、くの字形に屈曲。口唇部に連続した刻みを施し、口縁部に単列の角押文による渦巻状の文様を施文する。Ⅲ層出土。勝坂１式。
4	深鉢	胴部片。隆帯による区画を配した後、隆帯上に一部幅広爪形文による刻みを加える。隆対鰐には三角押文を施文する。Ⅲ層出土。勝坂１式。
5	深鉢	口縁片。隆帯による区画を配し、その両鰐及び区画内に爪形文を施文する。Ⅲ層出土。勝坂１式。
6	深鉢	口縁部片。口唇部外面が蹲状になる。口縁部直下に幅広爪形文が施される。表土出土。勝坂２式。
7	深鉢	口縁部片。内面の稜が剥がれている。口縁部に蛇行する隆帯を貼り付けた後、矢羽状？の刻みを施す。表土出土。勝坂２式。
8	深鉢	胴部片。隆帯と集合沈線によるパネル文を配する。表土出土。勝坂２式。
9	深鉢	胴部片。隆帯と幅広爪形文によるパネル文を配する。表土出土。勝坂２式。
10	深鉢	胴部片。隆帯による区画を配した後、区画内に集合沈線を施文する。Ⅲ層出土。勝坂２式。
11	深鉢	胴部片。隆帯による区画を配した後、隆帯上に一部幅広爪形文による刻みを加える。区画内は沈線による幾何学状文や、交互刺突を加えた集合沈線を施文する。Ⅲ層出土。勝坂２式。
12	深鉢	胴部片。隆帯による区画を配した後、隆帯上に一部幅広爪形文による刻みを加える。区画内は集合沈線・三叉文を施文する。Ⅲ層出土。勝坂２式。
13	深鉢	胴部片。条線を縦方向に施文した後、幅広爪形文・山型の三角押文を施文する。表土出土。勝坂２式。
14	深鉢	胴部片。隆帯による渦巻状の文様を施文した後、隆帯上に一部幅広爪形文による刻みを加える。Ⅲ層出土。勝坂２式。
15	深鉢	頸部片。頸部に連続爪形文を配する。表土出土。勝坂式。
16	深鉢	口縁部片（突起部分）。眼鏡状突起。内外面とも丁寧なナデによる調整を施す。Ⅲ層出土。勝坂３式。
17	深鉢	口縁部片（突起部分）。実測図中央は眼鏡状突起、右側は円環状の突起か。扁平な隆帯による文様を配し、内外面とも丁寧なナデによる調整を施す。表土出土。勝坂３式。
18	深鉢	口縁部片。ソロバン玉形に屈曲。口縁部に突起を配する。外面全体に丁寧な横方向のナデを施す。表土出土。勝坂式。
19	深鉢	口縁部片。口唇部が内面に屈曲。単節RLを横方向に施文する。表土出土。勝坂式？。
20	深鉢	胴部片。多条RLを斜め方向に施文する。胴部径は小さい。Ⅲ層出土。勝坂式。
21 22	深鉢	口縁部から胴部下半の破片。４単位の波状口縁、胴部上半が膨らみ、頸部から口縁部にかけて外反する。波状口縁の波頂部から粘土棒を芯として粘土帯で覆った突起を配する。粘土帯上は棒状工具による刻みを連続して加える。口唇部外側には粘土帯を蹲状に貼り付け、内面には稜を作り出す。外面は全体的に横方向の丁寧なナデが施される。胎土には雲母・長石が多く含まれる。Ⅲ層出土。阿玉台Ⅱ式。
23	深鉢	口縁部片。隆帯による楕円状区画を配し、隆帯に沿って２列の押引文を施文する。表土出土。阿玉台Ⅰb式。
24	深鉢	口縁部片。大きく内湾する。口縁部に隆帯による区画を配し、更に波状の粘土紐を貼り付ける。隆帯鰐及び区画内に細い波状の押引文、区画外に２列１組の細い押引文を波状に施文する。胎土には雲母、長石を多く含む。Ⅲ層出土。阿玉台Ⅰb～Ⅱ式。
25	深鉢	口縁部片。くの字状に屈曲し、外反する。波長部から垂下する隆帯による区画を配し、内部に粗い幅広爪形文を施文する。Ⅲ層出土。阿玉台Ⅲ式。
26	深鉢	頸部片。多条RLを施文した後に、隆帯による区画・懸垂文を配する。胎土に雲母・長石を多く含む。表土出土。阿玉台Ⅳ式。
27	深鉢	胴部片。連続爪形文を配する。表土出土。阿玉台式。
28	浅鉢	口縁部から胴部の破片。大きく内湾し、口縁部はほぼ直立する。内面に稜を作り出す。口縁部下端に沈線が巡る。内外面とも丁寧なミガキ状の調整を施す。胎土には長石を多く含む。Ⅲ層出土。中期前半。
29	浅鉢	口縁部片。波状口縁（単位不明）。内面に稜を作り出す。外面、内面ともに丁寧なミガキ状の調整を施す。Ⅲ層出土。阿玉台式。
30	深鉢	口縁部片。撚糸rを縦方向に施文した後、隆帯による口縁部区画を配する。表土出土。加曽利E1式。
31	深鉢	口縁部片。沈線による多重の渦巻状の文様を施文する。Ⅲ層出土。加曽利E1式。
32	深鉢	口縁部片。強く内湾する。沈線による多重の渦巻状の文様を施文する。Ⅲ層出土。加曽利E1式。
33	深鉢	口縁部片。隆帯と沈線による多重の弧状の文様を施文する。Ⅲ層出土。加曽利E1式。
34	深鉢	頸部片。縄文（原体不明）を施文した後、隆帯による頸部区画を配する。頸部は無文。Ⅲ層出土。加曽利E2式。
35	深鉢	口縁部片。単節RLを縦方向に施文した後、隆帯と沈線によるロ縁部区画、沈線による懸垂文を配する。口縁部区画内に、斜行する単沈線を連続して施文する。Ⅲ層出土。加曽利E2式。
36	深鉢	口縁部片。多条RLを縦方向に施文した後、隆帯と沈線によるロ縁部区画を配する。Ⅲ層出土。加曽利E2式。
37	深鉢	口縁部片。単節RLを横方向に施文した後に、隆帯によるロ縁部の区画、文様を配する。Ⅲ層出土。加曽利E2式。
38	深鉢	口縁部片。隆帯による渦巻文を貼り付けた後、縄文（原体不明）を施文する。表土出土。加曽利E3式。

No.	器形	器形の特徴・部位・文様構成
39	深鉢	口縁部片。隆帯による楕円区画を配した後、区画内に縄文（原体不明）を施文する。Ⅲ層出土。
40	深鉢	口縁部片。複節RLRを横方向に施文した後に、隆帯による区画を配する。表土出土。加曽利E3式。
41	深鉢	口縁部片。単節RLを縦方向に施文した後、沈線による逆U字状の区画を配する。区画内は無文。表土出土。加曽利E3式新。
42	深鉢	口縁部片。断面三角形の微隆起帯による口縁部区画を配し、隆帯上から単節RLを縦方向に施文する。Ⅲ層出土。加曽利E4式。
43	深鉢	胴部片。粘土紐を縦方向に貼り付けた後、単節RLを縦方向に施文する。Ⅲ層出土。曽利Ⅲ式。
44	深鉢	胴部の破片。単節RLを縦方向に施文した後、３本１組の沈線による横方向の区画と懸垂文を施文する。Ⅲ層出土。連弧文。
45	深鉢	胴部片。単節RLを縦方向に施文した後、３本１組の沈線による懸垂文を施文し、その内部を磨り消す。Ⅲ層出土。加曽利E3式。
46	深鉢	胴部片。単節RLを縦方向に施文した後、沈線による懸垂文を配し、その中を磨り消す。表土出土。加曽利E3式。
47	深鉢	胴部片。単節RLを縦方向に施文した後、沈線による懸垂文を配し、その中を磨り消す。Ⅲ層出土。加曽利E3式。
48	深鉢	胴部片。単節RLを縦方向に施文した後、沈線による懸垂文を配し、その中を磨り消す。Ⅲ層出土。加曽利E3式。
49	深鉢	胴部片。縄文（原体不明）を施文した後、沈線による懸垂文を配し、その中を磨り消す。Ⅲ層出土。加曽利E3式。
50	深鉢	胴部片。単節RLを縦方向に施文した後、沈線による懸垂文を配し、その中を弱く磨り消す。破片下端は輪積み部分で欠損。表土出土。加曽利E3式。
51	深鉢	胴部片。撚糸l を縦方向に施文した後、隆帯と沈線による区画を配する。表土出土。加曽利E式。
52	深鉢	胴部片。撚糸r を縦方向に施文。表土出土。加曽利E式。
53	深鉢	胴部片。多条RLを縦方向に施文する。Ⅲ層出土。勝坂式。
54	深鉢	胴部片。単節RLを縦方向に施文する。Ⅲ層出土。加曽利E式。
55	深鉢	口縁部片。外反する。口唇部内面は折り返し状となり、外面は無文。Ⅲ層出土。曽利式。
56	深鉢	頸部片。胴部に単節RLを縦方向に施文した後、頸部に波状の粘土紐・棒状工具による押さえを加えた隆帯を巡らせる。口縁部は無文。Ⅲ層出土。曽利Ⅲ式。
57	深鉢	頸部片。波状の粘土紐を３段貼り付ける。口縁部は無文で、内外面とも丁寧なミガキ状の調整を施す。Ⅲ層出土。曽利Ⅲ式。
58	深鉢	胴部片。棒状工具による押さえを加えた隆帯を縦方向に貼り付け、条線を施文する。表土出土。曽利Ⅲ式。
59	深鉢	胴部片。半截竹管腹による条線を縦方向に施文する。Ⅲ層出土。曽利式。
60	深鉢	胴部片。沈線による懸垂文を配し、斜行沈線を充填する。Ⅲ層出土。曽利Ⅳ式。
61	深鉢	胴部片。節の細かい単節LRを縦方向に施文する。Ⅲ層出土。称名寺Ⅰ式。
62	深鉢	胴部片。沈線による区画を配した後、節の細かい単節RLを区画内に充填する。Ⅲ層出土。称名寺Ⅰ式。
63	剝片	黒曜石製。最大長2.2cm、最大幅1.8cm、最大厚0.3cm、重量0.7ｇ。不定形で薄手。Ⅲ層出土。
64	打製石斧	黒色安山岩（ガラス・長石を含む）。最大長12.0cm、最大幅4.3cm、最大幅2.3cm、重量118.8ｇ。完形。表面の一部に自然面を残す。体部が分厚く、基部は尖り、刃部は鋭利に整形する。側部に敲打痕が著しい。Ⅲ層出土。
65	打製石斧	安山岩（群馬県産か）。最大長8.8cm、最大幅4.3cm、最大厚3.1cm、重量144.0ｇ。刃部一部欠損。両面に自然面を残す。刃部は欠損し、基部は尖頭状を呈する。側部に敲打痕が著しい。Ⅲ層出土。
66	打製石斧	砂岩。最大長9.6cm、最大幅4.1cm、最大厚1.3cm、重量73.0ｇ。完形。表面に自然面を残す。横長剝片を素材とし、左側部は欠損の可能性あり。右側面に敲打痕。SS20出土。
67	打製石斧	片麻岩。最大長7.8cm、最大幅4.4cm、最大厚1.4cm、重量71.5ｇ。刃部欠損。基部端面の一部に自然面を残し、基本的には両面加工の概形を呈すると考えられる。Ⅲ層出土。
68	叩石	砂岩。最大長9.5cm、最大幅6.6cm、最大厚4.6cm、重量374.0ｇ。完形。自然礫を用い、側部を敲打する。被熱により赤化している。SS20出土。
69	磨石	砂岩。最大長13.8cm、最大幅8.3cm、最大厚4.7cm、重量825.0ｇ。完形。表面と側面の一部に摩滅痕を伴う。SS20出土。
70	磨石	花崗閃緑岩。最大長11.8cm、最大幅9.6cm、最大厚5.3cm、重量862.0ｇ。完形。自然礫を利用し全面に摩滅痕を伴う。被熱により赤化している。Ⅲ層出土。

恋ヶ窪遺跡特有の時期様相を示しているが、中期前葉の阿玉台式、後期の称名寺式の資料も少量見られた。図化した資料は１～20・53が勝坂式、21～29が阿玉台式、30～60が加曽利Ｅおよび連弧文・曽利式、61・62が称名寺式にそれぞれ分類される。このうち21・22・28の阿玉台式の浅鉢と深鉢は、調査区南東隅のⅢｂ層中から潰れた状態で出土した（写真図版３－１～３）。その他63は黒曜石製の剥片、64～67は打製石斧、68は叩石、69・70は磨石である。

第5章　結語

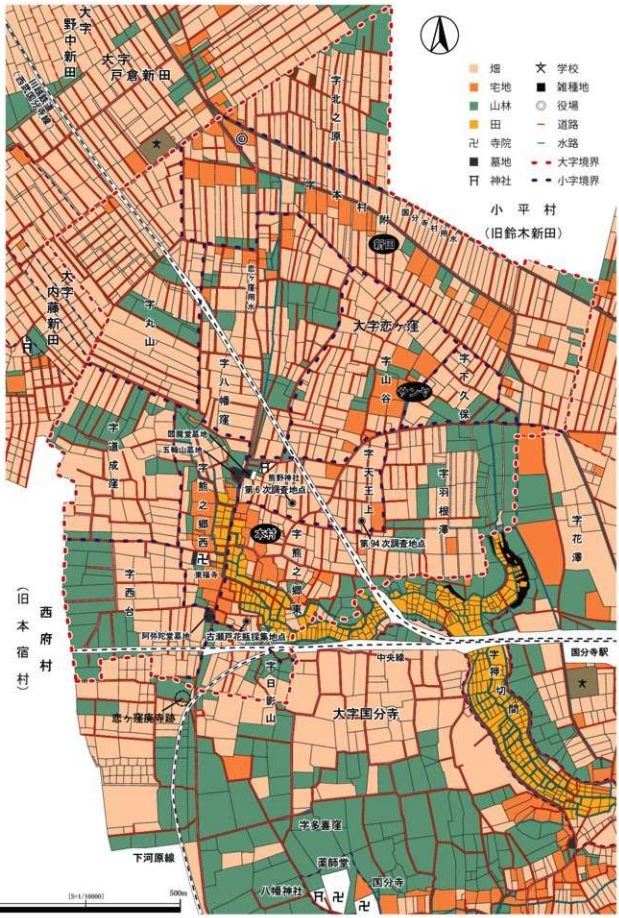
恋ヶ窪遺跡第94次調査では、中世の溝状遺構1条とピット4基、縄文時代中期の集石および土坑が各1基ずつ発見された。得られた考古学的情報は僅かでしかないが、最後に恋ヶ窪遺跡の今後の調査に向けた課題について若干触れておくこととしたい。

まず、日立製作所中央研究所構内の発掘調査としては、今次の調査ではじめて中世に関わる遺構と遺物が発見された。検出した溝は延長10数m部分と出土遺物も常滑甕の破片が2点でしかなく、その性格の究明には到底至らないけれども、恋ヶ窪村の存立時期を考えるうえで中世段階の土地利用痕跡を見出した意義は決して小さくはないだろう[注1]。第2章第2節でも触れたとおり、恋ヶ窪遺跡はこれまで縄文時代の集落跡として多くの遺構や遺物が調査されてきたが、ここ40年にわたる調査の蓄積によって、域内を古代の東山道武蔵路が縦貫し、中世では昭和52年度に実施した第6次調査で地下式壙1基と13世紀末の常滑甕、さらに包蔵地外ではあるが、遺跡の南方に所在する日影山の北側畑地内で古瀬戸の灰釉花瓶が採集されるなど、断片的ながらも古代～中世の情報が得られてきた。また、本報告書作成中の平成27年度にも、集合住宅建設に伴う確認調査を実施し（第95次調査）、近世の掘立柱建物跡を検出している[注2]。

その一方で、恋ヶ窪谷を挟んだ南西側台地上にある恋ヶ窪廃寺跡（国分寺市№22遺跡）では、注目すべき中世に関わる調査成果が得られている（第4図）。同遺跡はこれまでに7回に及ぶ発掘調査によって、礎石建物跡1棟・掘立柱建物6棟・塀跡5条の他、土坑墓12基、火葬墓6基などの古代～中世にかかる遺構が発見され、その変遷は第一期（平安時代後半）、第二期（鎌倉時代後半）、第三期（鎌倉時代末期～室町時代）の大略三時期に区分して捉えられており[注3]、なかでも陶磁器類は13世紀末～15世紀代の常滑窯・古瀬戸窯製品、また延文から明応年間まで14世紀後半～15世紀末の年号を有する板碑群が出土するなど、第三期を中心とした遺物が目立った存在で、同期の情景は『廻国雑記』を著した道興准后らが目にした光景であったかもしれない。

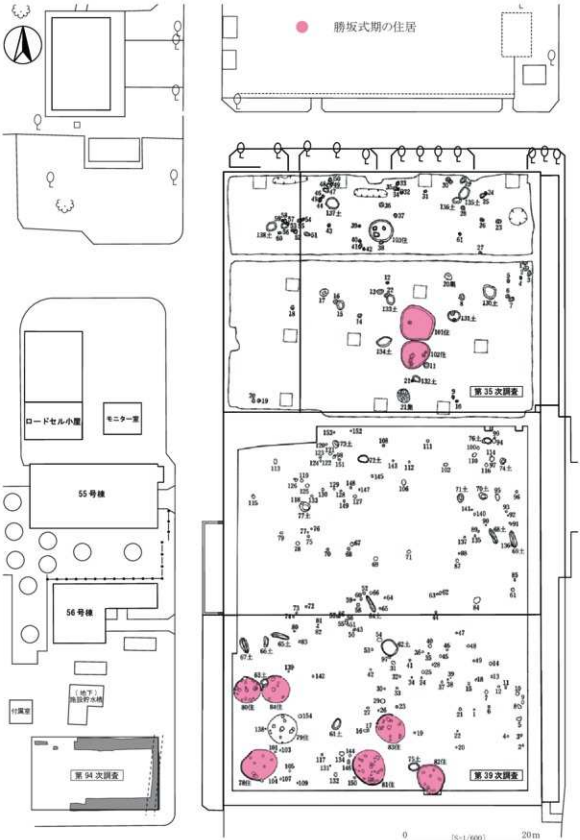
そうしたなかで、近世恋ヶ窪村の景観的要素を『新編武蔵風土記稿』から探ってみると、「陸田多くして水田少し」、「家数凡二十四軒」、「用水当村の北にて三岐に別れ、一を貫井用水、一を国分寺村用水、一を村田の用水とす」とあり、その他寺社として熊野権現社・東福寺・彌陀堂等の存在が挙げられるが、用水や寺社の一部は現代の景観のなかにも名残を留めている。このうち、昭和30年代頃まで恋ヶ窪谷やさんや谷で営まれていた同村城の水田は、玉川上水からの分水の一つ恋ヶ窪村用水（第3図）が敷設される以前は、その水源を湧水のみに依拠していた、いわゆる谷戸田であった。慶安二（1649）年頃に作成された『武蔵田園簿』には、恋ヶ窪村の石高として「一　高三拾三石五斗四合、内　三斗九升弐合　田方、三拾三石壱斗一升弐合　畑方」、また延宝六（1678）年に行われた検地でも、字嶋地に六筆の田が記されていることから、17世紀中頃には既に水田は存在していた様子が窺え、史料の上からは水田の開田時期を明らかにし得ないが、近世以前に遡る可能性は充分考えられよう。また、村の居住域は「本村」・「サンヤ」・「新田」の3つの集落に分かれ、名主や組頭を輩出していた本村は明治時代初期には20軒、サンヤは8軒、新田に27軒の家数を有していたが（大島他1995）、このうち本村の集落は恋ヶ窪谷の谷筋沿いに開けた窪地の両岸（字熊之郷東・熊之郷西）に、ハケを背にして屋敷地を並べている。恋ヶ窪村には明治時代初頭の地籍図は現存していないものの、こうした状況は、昭和2年の国分寺村全図からも、おおよそ近世恋ヶ窪村の景観を留めていた様子がわかる（第18図）。

さて、現在の恋ヶ窪遺跡の周知範囲（第3図）を同図と照らしてみると、本村集落や水田可耕地は遺跡の範囲に殆ど含まれていないことが一目瞭然である。既往の調査履歴で、過去に範囲確認を目的とした学



第 18 図　旧恋ヶ窪村周辺の地籍図（昭和 2 年　国分寺村全図をトレース）

第 19 図　恋ヶ窪遺跡西側の竪穴住居分布



第20図　恋ヶ窪遺跡東側の竪穴住居分布

術調査は幾度も行ってきたけれども（第２表）、そもそも恋ヶ窪遺跡は、恋ヶ窪谷の北東台地上に展開したことが予測される縄文時代の集落跡を追究した結果の範囲設定であって、中近世の恋ヶ窪村の主たる生活領域を視野にしたものではなかったと言ってよい。平成 19 年に東山道武蔵路が遺跡の北側にも延びていることを確認し（第 82 次調査）、同地の埋蔵文化財包蔵地を広げた経緯はあるものの、今後も時機を捉えて恋ヶ窪遺跡の範囲を見直すことは検討すべき課題の一つである。

一方、縄文時代については、中期中葉の阿玉台・勝坂式期～後葉の加曾利Ｅ・曾利式期を中心としつつ後期初頭の称名寺式期の遺物も得られるなど、従前の調査成果を追認する内容であった。ただ、東側約 20 ｍを隔てた第 35・39 次調査内容から、展開することが予測された竪穴住居は今次の調査範囲からは検出されず、集落の西側への広がりを掴むうえでは示唆的な状況が判明した（第 20 図）。しかし、西武国分寺線を挟んで今次調査区のさらに約 50 ｍ西側では、竪穴住居が重複密集して分布する様子が明らかであり（第 19 図）、より詳細な状況を把握するためには、さらなる調査の進展に期待を寄せたい。また、第 19・20 図には、既刊の報告書を参考にしつつ竪穴住居を時期ごとに色分けして示した。一見して勝坂式期の住居が多い印象を抱くが、第 14・16 ～ 19・21．26 次調査での分析では「一時期の住居棟数は見かけほど多くはなく、居住場所は時期によって絶えず移動していることが理解される」とした中山真治氏らの所見が得られており（上敷領・中山・黒尾 1995）、他の調査次数も同様の視点でもって住居の時期比定を行ったうえで、恋ヶ窪・羽根沢・恋ヶ窪東遺跡と便宜的に区分している周知の遺跡単位ではなく、野川源流域総体で縄文時代の居住動向を把握していく必要があるだろう。

（注１）

平成 27 年現在、今次の調査地点から北に約 100 ｍ離れた羽根沢遺跡で、大型開発に伴う発掘調査が進行中で（羽根沢遺跡第６・８次調査）、溝の延長部分の検出状況が注目される。

（注２）

恋ヶ窪遺跡第 95 次調査の成果は、平成 28 年度末に刊行予定。

（注３）

第１次調査・第６次調査・第７次調査分については、以下の報告書が刊行されている。

滝口　宏他 1972『恋ヶ窪堂址調査報告』泉町廃寺址遺跡調査会

福田信夫 1989『恋ヶ窪廃寺跡発掘調査概報Ⅰ－西国分寺駅南口地区第一種市街地再開発事業に伴う調査－』国分寺市遺跡調査会

竹田　均 2005『恋ヶ窪廃寺跡遺跡－国分寺３・４・14 是政恋ヶ窪線整備事業に伴う発掘調査－』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 171 集

また、西国分寺駅東地区第一種市街地再開発事業に伴い、恋ヶ窪廃寺跡東側隣接地部分の調査成果として、坂詰秀一・板倉歓之他 2006『武蔵国分寺跡発掘調査概報 33』国分寺市遺跡調査会がある。

【引用・参考文献】

秋山道生 1990「野川流域の縄文時代」『多摩のあゆみ』第 61 号　多摩中央信用金庫

我孫子昭二 1979「第１章　調査にいたるいきさつ」『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ』国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会

市川健二郎 1949「武蔵国分寺恋ヶ窪敷石遺跡発掘調査報告」『学習院史学会報』１

Ⅰ・Ｙ 1951「都下北多摩郡国分寺町恋ヶ窪発見の土偶」考古学ノート１　武蔵野文化協会

小田静夫 2015「東山道遺跡の保存に貢献した方々を偲んで」『シンポジウム・国分寺市東山道遺跡発掘 20 周年　東山道武蔵路調査の最前線－多摩郡から入間郡まで－』国分寺・名水と歴史的景観を守る会

小野本敦 2008『東山道武蔵路発掘調査概報Ⅰ－都市計画道路３・４・６号線築造工事に伴う調査－』国分寺市遺跡調査会

大島一人他 1995『国分寺市の民俗－本多新田・恋ヶ窪村の民俗－』国分寺市教育委員会

株式会社日立製作所中央研究所30年史編さん委員会 1972『日立中央研究所史1』株式会社日立製作所中央研究所
上敷領久・中山真治・黒尾和久 1991・2008『恋ヶ窪遺跡調査報告V（本文編・図版編）』国分寺市教育委員会
上敷領久 2007『平成16・17年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
上敷領久・中道　誠 2014『平成24年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
上敷領久・中道　誠・依田亮一・河野礼子・梶ヶ山真里 2015『平成25年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』
国分寺市教育委員会
上村昌男 1999「東京都恋ヶ窪谷低地の道路遺構」古代交通研究会編『古代交通研究』第9号　八木書店
北原　進 1976『国分寺市史料集（Ⅰ）村落状況・支配関係文書』国分寺市史編さん委員会
後藤守一 1937「武蔵国分寺村に於ける敷石住居遺跡の発掘」『考古学雑誌』27-11
坂詰秀一・上村昌男 2000『恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報Ⅱ－丸紅株式会社共同住宅建設に伴う調査－』
国分寺市遺跡調査会
坂詰秀一・上敷領久 2003『恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報Ⅲ－都営本町四丁目団地建替工事に伴う調査－』
国分寺市遺跡調査会
塩野半十郎 1970『多摩を掘る－花と縄文を追って－』武蔵書房
滝口　宏・広瀬昭弘他 1988『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅳ』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
立川明子 2008『平成18年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
立川明子 2009『平成19年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
立川明子 2011『平成23年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
寺前めぐみ・依田亮一・上敷領久・中道　誠 2013『平成23年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』
国分寺市教育委員会
永峯光一・広瀬昭弘・秋山道生他 1979『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ』国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会
永峯光一・広瀬昭弘・秋山道生他 1980『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ』国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会
永峯光一・広瀬昭弘・秋山道生他 1982『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ』国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会
広瀬昭弘・秋山道夫・砂田佳弘・山崎和巳 1985「縄文時代集落の研究－野川流域の中期を中心として－」
『東京考古』3　東京考古談話会
福田信夫・広瀬昭弘 1986「第二章　縄文時代　第7節　市内の遺跡」『国分寺市史　上巻』
国分寺市史編さん委員会
星野亮勝・広瀬昭弘・上村昌男・上敷領久 1990『恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報Ⅰ
－山一證券国分寺独身寮建設に伴う調査－』国分寺市遺跡調査会
星野亮勝・上村昌男・上敷領久 1992『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅵ－日立中央研究所研究棟・食堂・プール更衣室建設
工事に伴う調査－』国分寺市遺跡調査会
松井新一・藤間恭助 1965「国分寺市恋ヶ窪遺跡発掘調査概要」『多摩考古』第7号　多摩考古学会
松浦宥一郎 1984『寄贈　塩野コレクション目録』東京国立博物館
三輪善之助 1922「武蔵国分寺村発見の土器」『人類学雑誌』37－12
吉田　格 1957「東京都国分寺町恋ヶ窪竪穴住居址の土器に就いて」『銅鐸』12
吉田　格 1962「東京都国分寺町中期縄文式住居址調査概報」『武蔵野』41－3・4
吉田　格・横山悦枝 1986「第二章　縄文時代　第2節　市内の遺跡と調査研究の歩み」『国分寺市史　上巻』
国分寺市史編さん委員会
吉田　格・上村昌男 1996『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅶ－国分寺市公共下水道整備中部地区32号工事に伴う調査－』
国分寺市遺跡調査会
吉田　格・上村昌男 1997『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅷ－国分寺市公共下水道面整備工事に伴う調査－』
国分寺市遺跡調査会

写真図版

写真図版 1

1. 調査地点周辺の旧景観（1947 年 10 月 24 日　米軍撮影）

2. 調査地点周辺の景観（1987 年撮影）

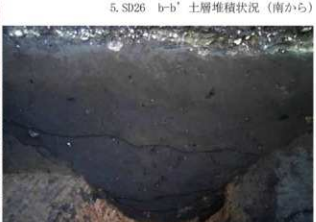
1. SD26 プラン確認状況（南から）

2. SD26 プラン確認状況（北から）

3. SD26　a-a’土層堆積状況（南から）

4. SD26 完掘状況（南から）

5. SD26　b-b’土層堆積状況（南から）

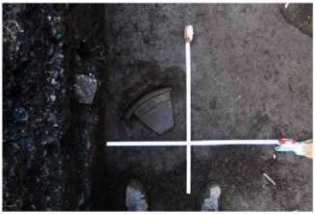


6. SD26　c-c’土層堆積状況（北から）

写真図版３

1. PJ-1 周辺遺物出土状況（東から）

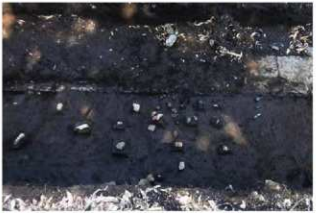
2. PJ-1 周辺遺物出土状況（西から）



3. PJ-1 周辺遺物出土状況（北から）

4. PJ-1 土層堆積状況（南から）

5. SS30 検出状況（北から）



6. SS30 検出状況（北から）

7. SK205J 土層堆積状況（北から）

1. SK205J 全景（東から）

2. SK205J P-1 土層堆積状況（西から）

3. PJ-2 土層堆積状況（南から）

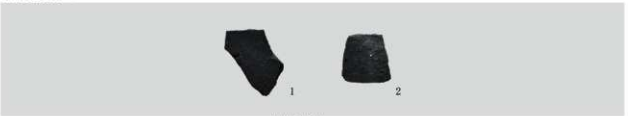
4. PJ-3 土層堆積状況（東から）

5. PJ-4 土層堆積状況（東から）

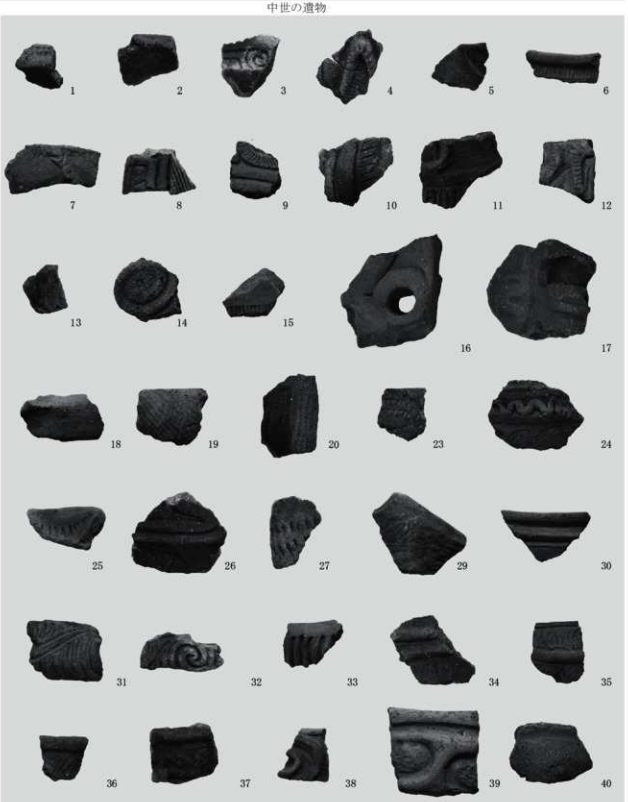
6. 旧石器時代試掘坑（西から）

7. 調査着手前現況（南から）

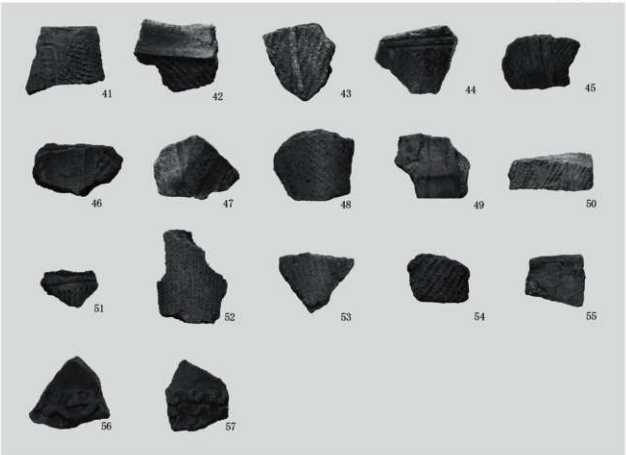
8. 表土掘削作業（北から）



中世の遺物

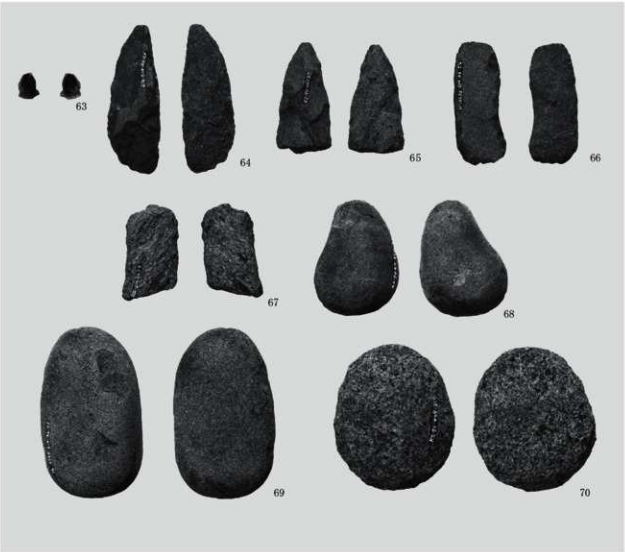


縄文時代の遺物（1）



縄文時代の遺物（2）

写真図版 7



縄文時代の遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	こいがくぼいせきちょうさほうこく　きゅう　だい94じちょうさ
書名	恋ヶ窪遺跡調査報告　Ⅸ　第94次調査
副書名	日立製作所中央研究所構内純水設備付属建屋建設に伴う調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	坂詰秀一（編）　依田亮一　上敷領 久
編集機関	国分寺市遺跡調査団
所在地	〒185-0023　東京都国分寺市西元町1-13- 6（武蔵国分寺跡資料館付属棟内）
発行機関	株式会社日立製作所中央研究所・国分寺市遺跡調査会
発行年月日	2016年3月31日
規格／部数	A4判横組1段　47文字×39行　60頁（うち写真図版7頁）／300部

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
こいがくぼいせき 恋ヶ窪遺跡 （第94次調査）	とうきょうと 東京都 こくぶんじし 国分寺市 ひがしこいがくぼ 東恋ヶ窪 1丁目 280 番地内	13-214	2	35° 41′ 48″	139° 28′ 1″	2015.02.18 ～ 2015.03.13	65.4㎡	プラント建設に伴う緊急調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恋ヶ窪遺跡	集落跡	中世 縄文時代 （中期～後期）	溝　1条 ピット　4基 集石　1基 土坑　1基	陶器（常滑） 縄文土器・石器	日立中央研究所構内では初めてとなる中世遺構を検出。縄文時代は中期を中心とする遺物が出土した。

資料の保存先 資料の問合せ先	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課 〒185-0023　東京都国分寺市西元町1-13-10（武蔵国分寺跡資料館内） TEL.042-300-0073　FAX.042-300-0091　E-mail:bunkazai@city.kokubunji.tokyo.jp

恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅸ

第94次調査

－日立製作所中央研究所構内純水設備付属建屋建設に伴う調査－

発行日　平成28（2016）年3月31日
編　集　国分寺市遺跡調査団
〒185-0023　東京都国分寺市西元町1-13-6
（武蔵国分寺跡資料館付属棟内）
発　行　株式会社日立製作所中央研究所
国分寺市遺跡調査会
印　刷　㈱プリントショップ国分寺

©Kokubunji City Board of Education 2016. Printed in Japan

令和３年（2021）８月31日　デジタル版作成
表紙省略